

---

# 初恋と嫁き遅れとこれから、それから

水芙蓉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋と嫁き遅れとこれから、それから

### 【Nコード】

N4337V

### 【作者名】

水芙蓉

### 【あらすじ】

某小国の姫である私。何の因果か、最強最大と名高い国の皇帝の正妃になる羽目に。皇帝は18歳の男前。私？25歳。嫁き遅れ。容姿平凡。他、特に取り柄なし。なんで、こんなことになってしまったのかしら??? 思いつきの超短編……の予定が気がつけば、普通に連載のようになってしまったので、まとめました。

## その1

第一、大きい。

第二、怖い。

これが夫になる人の、私の最初の印象。

玉座に悠然と座しておられる御方。

つい先ごろ18歳になられたばかりと聞いている。

18歳といえば、私の弟よりも年下なのだけ。

だけど、さすが最大最強と名高い帝国の、これまた歴史に名を残すだろうと誉れ高い皇帝は迫力が違う。

許され、促されるまま顔を上げてお姿を拝見したものの、私はすぐに俯いてしまった。

そのお姿は、お噂通りの美丈夫。

老若の侍女達がこぞって教えてくれたとおり、かなりの男前だ。

でも、もう一度そのお姿を視界に納める度胸は持ち合わせていない。だって…まるで敵<sup>かたき</sup>のように、じっと私のことを睨んでいらつしやるんだもの。

まあ、睨みたい気持ちは分らないけれど。

「遠方遙々、ご苦労だったな」

広間に響く低い声。

声まで、ど迫力。

私は、本当にこの方の正妃となるのかしら。

正妃…自分で思い出して、ドーンと落ち込む。

何がどうしてこうなったのか。

ここに至っても、まったく以て分からない。

一応は王国の姫という肩書がついてはいても、私の故郷はこの帝国とは肩を並べようもない小国だ。

私個人にしたって、石を投げれば当たる程度の容姿。何ら、特別な能力も持ち合わせてはいない。

しかも…私は既に嫁き遅れという言葉も聞き慣れて久しい25歳。なぜ、それが、この国の正妃などという大それた地位に就かんとしているのか。

我が国に、この大国の正妃として、私を送り込む手腕を持つ宰相がいるなんて話は聞いたことないし。

この帝国が、我が小国ごときに弱みを握られているとも思えない。でも、実際に、どういう訳か、このほど私はこの国に正妃として迎えられてしまったらしい。

婚礼を祝う華やかな宴が続く中、私は御年輩の侍女にそつと連れ出された。

遠ざかる喧騒にほつと息をついた。

一見、お祝いムードが漂う中。

品定めする目。

妬む声。

びしびしと感じる不穏な空気の中、私はそれでも笑顔でそれらをやり過ごした。

伊達に歳は取ってない。

25歳という歳まで一人でいれば、公の場に出るたびに『この姫には何か問題があるのか』という目で見られるし、妙な噂も立てられる。

それらをかわす術を身につけて、早幾年…だ。とはいえ、さすがに疲れた。

注目的になることは慣れていないもの。

ああ…本当は、もう帰りたい気持ちでいっぱい。静かな図書館。

穏やかな庭の日だまり。

そこが私の場所。

本を読んだり、刺繍したり…のんびりとした時間が私の望みなのに。ああ、でも逃げる訳にはいかない。

この国が、その気になれば、我が国など指先で潰せてしまえるんだもの。

不用意な行動は慎むべき。

侍女は私に湯を浴びさせて、白い寝間着を着せて寝室へと案内してくれた。

「…ありがとうございます」

去ろうとする背に礼を言くと、今にも零れ落ちそうな涙を浮かべた瞳で私を見つめる。

その様子は何事!?

焦る私を放って、侍女は

「失礼します」

と礼をして部屋を出て行った。

「あのっ」

ちよつと、待って。

そんな訳のわからない余韻を残して、去らないで下さい。

一瞬の間をおき、不安に負けた私は理由を聞こうと扉に手をかけた。しかしながら、侍女を追いかけることはできなかった。

何故ならそこには。

「…陛下」

その方がやはり白い寝間着らしきものを着て立っていらっしやったから。

皇帝は、私を見下ろし

「どこに行くんだ?」

お尋ねになる。

先ほど広間で聞いた声よりも、どんと低い。

「…少し侍女に尋ねたいことがありますて…」

答えはしたが、声が震えた。

声も怖い。

その上、まん前にいらっしやるんだもの！

体温が伝わってきそうな近くに。

しかも、長身を少し屈めるようにして、小柄な私に視線を合わせて下さる。

その視線も…やっぱり、怖い。

「明日にしろ」

言うなり、皇帝は私を抱き上げた。

「…っな…」

抱っこなんて、20年も昔にされたっきり。

啞然とする私はベッドに降ろされて…そして、皇帝が私の上に重なってくる。

その体に似つかわしい大きな手のひらが、私の頬を撫でる。

うわっ。

なんですか。

この状況は。

「……………っあの…陛下!…」

無礼にも、その手を、自らの手で捕える。

皇帝は動きを止めた。

「なんだ？」

でも、止まったのは一瞬。

すぐにその手は、私の妨害など意に介した風もなく…頬から顎を撫でる。

これは…なんなんでしょう!?

「あの…っ…この体勢はいつたい？」

私の疑問をよそに、皇帝のもう片方の手が、私の腰から腿を幾度と撫でて。

慣れないその感覚に、ゾクゾクと背筋が慄く。

腿から膝へと手のひらを滑らせた皇帝は、そこで寝間着の裾を払い、私の脚をむき出しにした。

ちよつと、待つて。

もう一度、手を触れて動きを止めようとしたが、今度は一瞬たりと手は止まらない。

直接、膝から腿を撫で上げられて、私はぎくりと身を強張らせた。

「今夜は初夜だ」

その声で、耳元に囁くのは、やめて下さい！

しかも、なんで耳に唇を触れるんですか！？

「…することは一つだろう？」

それは…そうですね。

確かに教わりました。

適齢期の10年も昔に。

実践することがなかったので、すっかり失念してました。

結婚したら、コレですよ。

当然の流れですよ。

でも。

「…っあの…ご無理なさらないで下さい」

皇帝の手が、私の腿の内側で止まる。

止まったのはほっとしたけど…なぜ、そんな変なところで止めるの！？

「…本当に…あの…」

何と言つても、私は世間の適齢期を大きく外した25歳。

皇帝よりも7つも歳上だ。

こちらの陛下の後宮事情はよく存じ上げないけれど、若くてきれいな姫君達が皇帝の寵を競い合ってる模様は安易に想像できる。

先ほどの宴でも、華を添える姫君達が、新参者の正妃に恭しく、しかし敵意も露わに御挨拶下さったもの。

「それは…何もするな、ということか？」

皇帝は私に押し掛かったまま、手を触れたまま、そうお尋ねになる。いえいえ。

私にそんなことを命じる権利はありません。単純に、皇帝の心中を慮っているだけです。

どういう経緯か存じ上げないが、小国の…大した器量ではない年増を娶る羽目になった御方を。

「いえ…あのお好きになさって結構ですけど…結構なんですけど…」  
言えば、皇帝の手のひらが動き出す。

唇が私の首筋や肩に触れ。

侍女が褒めてくれる数少ない私の長所…そんなと褒められてもと思っていた…ふくよかな胸を手のひらが覆った。

う…お好きになさって結構…ではないかも。

これはかなり…嫌…かもしれない。

皇帝が私のあちらこちらに触れる。

身体が震えてくる。

情けないことに…いい歳をして…目頭が熱くなってくる。だって。

自分の身の程は十分に知れているし。

こちらの御方は、若々しくて雄々しくて。

釣り合う筈もない。

しかも、触れながら、見下ろしてくる視線の鋭さときたら。

相も変わらず、私は敵ですか？…というくらいのものだし。

「…分かった…もう、しない」

少しの間、私に触れていた皇帝は、唐突にそう言つと私の上から降りて、隣にゴロンと横になった。

私は一瞬ポカンと寝転がった方を見やり。

次には急いで乱された寝間着を整えた。

横たわった態勢で、その様子をご覧になっていた皇帝は儼然としたまま

「…寝る…」

呟いて、私に背中を向けられた。

「あ…はい。おやすみなさいませ」

反射的に答えれば、振り返って。

そして、少し困ったように…微笑まれた。  
あら。

そんな表情に、弟と同じ年頃らしさが、少しだけ垣間見えた。

朝、目覚めると既に皇帝はいらっしゃらなかった。

失敗した。

夜のお勤めはお相手できないまでも、朝の御挨拶ぐらいはきちんとしたかったのに。

思いながらもベッドを降りたところで、昨日、謎めいた態度を見せた侍女が現れた。

彼女は私の身繕いを手伝い、乱れたベッドを直しかけ、不意に動きを止めたかと思うと、すごい形相で私にずんずん詰め寄ってきた。

何？

何なの？

その迫力に私は後ずさって、べたりと壁に背中を張り付けた。

「…どういうことですか？」

母と同じ年ぐらいと思われる彼女は、怒りと戸惑いと…少しばかりの哀しみを表情に乘せて、私に問いかける。

しかし、その問いは意味不明。

「何がでしょう？」

逆に問えば。

「お妃様は…既にどなかと契ってらっしゃったのですか！？」

いきなりのそれは、私の中では先ほどの問い並みに意味不明。

「はい？」

「はい？…ではございません！」

侍女はぶわつと泣き出した。

この人は昨日から…いったい、何なの！？

「…ようやく…ようやく陛下が正妃として貴女様をお迎えになるこ

とが叶いましたのに！…っ何ゆえ、貴女様におかれましては、そのように陛下を裏切られたのでございますか！？」

いきなりの責めに、私は目を白黒するばかりだ。

何を言っているのか、まったく理解できない。

「あの…裏切った、とは？」

ひとまず、耳に残る不穏な言葉のその意味を問う。

「恋人は…っ…お国の方で…っ…ございますか？」

しゃくり上げながらの問いの意味は分かった。

「…恋人なんていませんか？」

「いませんとも。」

自慢ではないが、25年間一度としてそういった相手がいたことはない。

ええ、どうせ…誰にも相手にされない、その程度の女ですから。

「では、何故、お印がないのですか！？」

ちよつとへこんだ私を無視し、侍女は昨夜、結果として皇帝と私が添い寝するに終わったベッドをビシッと指差す。

「初めての契りのお印が何故ないのでしょうか！？」

「なんか、よく分かりませんが。」

ようするに昨晚、その…致してないことは、ばれてる訳ですね。

「何も…してないので」

正直に言う。

この者が毎日世話をしてくれるなら、話しておいた方が今後楽だろうから。

「…陛下が何もなさらなかったと？」

侍女が信じられないとでも言うように目を見開いて、声を震わせて尋ねるのに。

「はい」

なさいませんでした。

はっきり答えた。

侍女の勢いが、急激に失われていく。

「…そんな訳が…陛下は…昨夜は…その…どこかお加減でも…」  
「…もしか、皇帝が、何か病気だとか心配したりしてますか？」

「いえいえ、私のようなもの相手に慈悲深くも、最初はなさるおつもりのようにしたよ。」

「でも、所詮、私ですから。」

「いえ…でも…まあ、私もご覧とおり、大した容姿でもなければ、年増ですし…」

「ようするに、その気にならなかったのだと言いたかったのだが。」

「何をおっしゃってるんですか！」

「彼女は勢いを取り戻すと、全身でそれを否定した。」

そして、続いた言葉は、今までの言葉の中で、一番意味不明。

「貴女様は、陛下の初恋の君でいらっしゃるの！」

「……………初恋？」

「なんですか？」

「その甘ったるい、あの皇帝と縁があるとは思えない単語は。」

「そうです！この国の決まりごとで、皇帝は18になると、正妃を迎えます」

「ああ、そうなんですか。」

「そういえば、18歳になったばかりでしたね。  
で？」

「陛下は、18になったら貴女を妻にせんと、ありとあらゆる手段を講じ、それはもう涙ぐましい努力を」

「また、意味不明。」

「ありとあらゆる手段って？」

「それから、何？」

「涙ぐましい…」

「努力？」

「そうですとも」

それから、侍女は切々と語った。

8歳の時に皇帝…その当時は皇太子であられた訳だけど…が、私を妻にしたいと父上に申し出たこと。

当時は少々病弱で、故に弱虫で泣き虫だった彼…それはちよつと、信じがたいけど…に、では強い皇帝になることができたならそれを許そうと当時の父王が約束したこと。

以来、彼が、文武に限らず全てにおいて、それはそれは涙ぐましい努力をして今のようになつた、と。

以上、努力の巻。

その間、私はといえば。

ようするに、どこぞにも嫁ぐことを禁じられていたということらしい。

この大国に。

例え、途中で皇帝がこの条件に飽きても諦めても。

最低でも、それなりの嫁ぎ先を用意するという約束の上で。

以上、手段の巻。

どうりで。

私が恋愛ごとに興味を示すこともなく、舞踏会を放り出して図書館に入り浸たろうが、お茶会をしり目に呑気に庭で編み物に興じたりしていても、誰もお小言の一つを漏らすこともなかった訳だ。

私は…とうに行き先が決まっていたのだから。

「…ですから、昨夜、陛下が貴女様と契られないなどは考えられ…」

熱く熱く語る侍女の言葉が途切れた。

そして。

「…何をべらべらと話してるんだ？」

背後で、地を這うような冷たい声が響く。

私は振り返って。

そこに、今の話とは到底繋がらない、鋭い視線を向けている御方の姿を見つける。

言ってみれば…私が行かず後家だったのは…この方のせいということ？

別にそれは構わないけど。

むしろ、嫁に行けとせつつかれることのない日々は、とても幸せだったもの。

でも、初恋？

この方の？

いつ？

この方が…8歳ということは…私は15歳。

う…この年の差は、思い出すたびに突き刺さるわ。

いやいや、今はそうでなくて。

10年前…何か…あったかしら。

ああ、思い出せない。

というか、いろいろと聞いてしまったせいで。

「頭が混乱中…です」

庭を歩いている。

素晴らしい庭だ。

できれば、庭師のガイドで歩きたい。

花の名前とか、コンセプトなんか聞きながら。

けれども今私の隣にいらっしゃるのは。

憮然とした皇帝。

だが、この態度も私のせいだと思えば、なんとか打破せねば。

「あの」

声をかける。

皇帝は足を止めて、私を見下ろした。

「…あの…私、陛下に謁見をお許し頂いたことが？」  
皇帝は眉を寄せた。

「覚えてないのか？」

責めている風でもなければ、落胆している風でもない。  
でも、ちよつと罪悪感。

10年前…15歳の頃。

あの頃は…一応、いくつかお見合いの話もあったりした。  
だけれど、もちろんその中に8歳の皇太子がいらつしやつた筈もない。

「…誰かとお間違えて…」

睨まれて、言葉が途切れる。

すいません。

だから、睨まないで下さい。

「間違えてなどいない…お前だ」

言いながら、皇帝の腕がいきなり私の腰に回る。

強引な…でも、乱暴ではない動作で、私は皇帝の正面に立たされた。  
その態度は、それはもう物慣れていらつしやつて…思い出そうとしている8歳の姿は僅かな面影も見当たらない。

「…あの…あのですね…」

近付いてくる皇帝の御顔を、無礼でも手のひらで押して遠ざける。

皇帝は私の手首を捕えて顔から外すと…そこに唇を押し当てた。  
うわ。

なんですか、それは。

「…私に間違いないのですか？」

手にひらを必死に取り返そうとしながら尋ねる。

「そうだ…間違える筈がない」

私の手のひらなのに。

皇帝にしっかりと握られていて戻つて来ない。

「…10年も？…ずっと？…あんなにきれいな方がたくさんいるのに？」

皇帝は私の手首をようやく離して下さった。けど、変わりのようにぐっと引き寄せらる。ここ、外です。

誰がいるか、誰が見ているか分からない場所です！やめて下さい！

私の心の叫びは、微塵も届かず。

皇帝は昨日からずっと続く、視線で。

「どれもお前の代わりだ」

さらりとおっしゃる。

いや、それは。

代わりの方が、本物よりよほど上だなんて。

「そんな恐れ多い… どの方も私よりきれいで若い姫君ばかりですよ！」

例えば、陛下の初恋云々が本当だったとして。

今更、本物を手にしたところで、時は残酷にもすっかり流れ、今や私はただの年増だ。

そんな女を手に入れたところで。

「私なんて… 絶対、がっかりなさいます」

そうしたら、私にはこの後宮で、お飾りの正妃として過ごす日々が残されるのか。

いや、それぐらいならまだ良い。

というか、そうなる覚悟でここに来た。

だが、がっかりなさった陛下の、更のご不興でも買おうものなら… 国に迷惑がかかったりするのか。

ゾクツと背筋が凍った。

小国とは言え、民はそこで一生懸命生きているんだもの。

25年間、あの国に生きてきたんだもの。

私のせいで、国に何かあったら… そんなの、耐えられない。

「…陛下… 私、ご覧のとおり何の取り柄もない… 平凡な… しかも陛下よりも8歳も年上の年増です… どうぞ、このままお捨て置き下さ

いませ……」

そう、そつとしておいてもらおう。

婚礼が成立してしまつた以上、それをなかつたことにするには難しいけれど。

「分かつた」

皇帝が頷いた。

私の心にはつと光が差す。

「分かつて頂けましたか？」

分かつて頂けたなら、ありがたい。

私、ここで大人しくしてますから。

3年ばかりすれば、跡取りを産まない正妃として、国に戻されるのが慣例。

一度は約束通り嫁いだのだから、この国も我が国に何かをすることはないだろう。

3年ぐらいなら、ここの図書館の本を読みあさっていればあつという間に違いない。

うん、気が楽になってきたわ。

「……俺が本気だと分かせてやる」

耳に届いた言葉。

「はい？」

思わず、見上げる。

いつもの鋭いばかりの視線が、とんでもない間近で私を見つめている。

「……俺が本気だと……お前に分からせる」

もう一度、皇帝はそうおっしゃつた。

「それまでは何もしないと誓う……だから」

そして、私の腰を更に引き寄せた。

おっしゃつてることと、行動が違いますか!?

何もしないとおっしゃるならば、離れて、一歩引いて、会話し  
よう！

「だから？」

私は皇帝の胸に手を置いて、なんとか少しでも離れようと試  
みる。  
でも。

「だから…国に帰せとは言っ  
な」  
命令？

というには、どうしてかお声が柔らかい。

私は再び皇帝の顔を見上げた。

相変わらずの視線だけど…なんというか…少し寂しげで、  
縋るよう  
な…。

何かを思い出させる瞳。

私は抵抗をやめてみた。

本気、というのが何か。

どのようにそれを分かせて下さるというのか。

分からないけれど。

私がそれを理解する前に、皇帝が私がつまらない女だと気がつく  
のが先だろう。

「…分かりました」

だから、私はそう答えた。

どうせ、とくに嫁き遅れなんだもの。

ここでもう何年か過ごしてみるのも悪くないかも。

そう思っていると皇帝の顔が近づいてきて…一瞬、唇に何か  
が触れ  
た。

「…っ何もしないと…」

触れたそれが皇帝の唇だったと分かり、私は本日何度目かの無礼  
を  
口にする。

「…お前がボーっとしているから…つい…な」

そう言っ  
て、皇帝は少  
しばかり照れくさそうに…昨夜も、ほんの少  
し見せた年相  
応の笑みを、私に向けられた。

ちなみに、睨んでいると私が感じた視線は、世間では熱い視線と称するのだと知ったのは、もう少し後のこと。

## その1（後書き）

現在、連載として書いている話が揃いも揃ってヘビーなので、突如、すつごく軽いお話が書きたくなってしまうました。それで、これです。

書いてる本人はとても楽しかったのです。

## その2

2日目の夜。

ようやく正妃として迎え入れることのできた女は、俺の姿を見てはちくりと目を瞬いた。

「どうなさったのですか？」

おい。

「それが輿入れ二日目の夜に、寝所を訪れた夫に言う言葉か？」

俺が半ば呆れながら思わず呟くと、彼女は引きつった笑顔で

「……昨日の今日なので、今夜はどちらかへいらっしやるものと」

正直にも、心中を暴露してくれる。

つまり。

昨夜、俺は不完全燃焼を強いられたから。

しかも、お前には何もしないなどと、約束までしたから。

だから、今日は他の女のところに行くだろう、と。

そう踏んでいた訳か。

「そこまで不実ではないつもりだがな」

確かに、この後宮は腐るほどの美姫に溢れている。

手をつけたのも、一人や二人ではないことも認めよう。

しかし、本気を分からせると言ったその舌の根も乾かぬうちに、

他の女の元に通うのは、いくらなんでもありえないだろう。

もつとも俺にしてみれば、それ以前の問題だ。

俺にとっては、どの女もお前の代わりに過ぎない。

そのお前自身を手に入れんとしている今、他の女を構っている暇がある筈がない。

しかし、彼女は俺の心中など知らぬげに

「私はそれで陛下を不実だとは思いませんが？」

耳に優しい声で、あっさりとつれないことを言ってくれるではないか。

「陛下には陛下のお立場がおりでしょう？ 私などお気になさらず、今まで通りになさって下さい」

正妃としては、模範的な態度だ。

お前の言うとおり、俺の立場ならば、毎晩違う女の元に通ったところで、誰に咎められることもない。

むしろ、昨夜、お前にお預けを食らわされた挙げ句、何もしないと約束したなどと、こうるさい者達に知れば、他に通えと進言されるばかりだろう。

だが、そんなすべてを差し置いて、お前のところに来ないではないられない俺の心中を、ここは慮って欲しいところだ。

しかし、彼女は嬉しそうな表情の一つを見せるでもなく、困ったという様子で俯き、落ち着かなげに寝間着の袖口や胸元の合わせを指先で整えている。

「俺が来ては迷惑か？」

自ら口にしておきながら、耳に響いた言葉に落ち込む。

迷惑。

それも、まあ、仕方ないのか。

俺にとっては忘れえぬ女性でも、彼女にとっては俺のことなど、記憶の片隅にも残らぬ出来事だったようだからな。

となれば、俺は権力をカサに彼女を手に入れた暴君か。

彼女に恋人がいなかったのは承知しているが、それも俺の策略だと言えなくはない。

もし、俺が彼女の人生に関わらなければ、今頃彼女はどこの男に嫁ぎ、暖かな家庭を築いていただろう。

それはひどく腹立たしい。彼女の傍らに、俺以外の男が在ることなど許せるものではない。

だが、一方で、それがあるべき姿だとも思えてくる。まずい。

本気で落ち込んできた。

いつもの冷静沈着な俺はどこに行った？

「あの、陛下」

果てしなく沈んでいきそうな俺の思考を、愛しい女の声が遮る。  
見遣れば、彼女は顔を上げ、少しばかり身を乗り出すようにして  
「お気に障ったのならお詫び申し上げます！ 私、あの……慣れ  
てないものですから……いい年をして情けないのですが……その、  
ですね……このように気にかけて頂いても、どうして良いのか……  
あの」

勢いよく話しはじめたものの俺が遠慮もなく見つめたせいか、再び  
恥ずかしげに俯いてしまう。

「俺がここにいて、迷惑ではないか？」

俺はもう一度問い掛けた。

きちんと彼女の口から、聞きたくて。

「もちろんです……来て下さって、ありがとうございます」

彼女は、少しばかりはにかむように、だが微笑んで答えてくれた。  
ナイスフォローだ。

下り坂だった気分も浮上する。

だから、つい言っていた。

「俺の立場などどうでもいい。俺はお前に会いたくて、ここに来ず  
にはいられないのだ」

自分でも、よくぞサラリと言ったのけたという言葉だ。

彼女は、ポカンと俺を見つめた。

再会してからこっち、どうしてもか、逸らされがちな瞳が、まっす  
ぐに俺に向けられている。

色は、優しげなセピア。

思い出にあるのと、全く違うない彩り。

ああ、間違いない、お前だ。

俺が欲しくて欲しくてたまらなかった女。

想い続けた女が目の前にいるという現実、ドクンと心臓が跳ね  
た。

その音が聞こえたかのように、彼女の瞳に意思が戻る。

そして、次にはパアツと頬が色付いた。  
彼女の民族の特徴ともいえる白磁の肌が、鮮やかなピンクに染まる。

その色香ときたら、まさに匂い立つという言葉がぴったりだ。

俺が彼女以外の女性を正妃とするつもりはないと口にするたびに、拳つてどこが良いのかと問い質す奴等に見せてやりたい……馬鹿言え、こんな艶やかな姿、誰だろうと見せる訳にいかないろう。

いや、だから、落ち着け、俺。

「……ありがとうございます」

先よりか細い、だが、よほど気持ちのこもって聞こえる言葉が心地好い。

「礼などいらない……これは俺の勝手だ」

更に本音を聞かせてやれば、いたたまれないように俯く。

耳まで赤く染めたその様は、どうみても年上のそれではない。

彼女を正妃に迎えるにあたって、一番問題になったのが7つという年の差だ。

俺自身、その年の差を埋めるために、自分を鍛え上げて来たと言っている。

だが、こうして向き合ってみれば、年の差などまったく感じない。それどころか、この後宮のどの女よりも物慣れない彼女の様子は、手を差し延べずにはいられない少女のような可憐さだ。

とは言っても、もちろん、少女ではないことは重々承知している。昨夜、少しばかり確かめもしたしな。

彼女が俯いたのを幸いと、俺はしげしげと、念願叶って妻とした女を見つめた。

薄手の寝間着から伸びる手足は細く長い。

だから、全体的に華奢なイメージを持たせる。

しかし、昨夜触れた胸は予想外にふくよかで、辿った腰も脚も程よく張り、そして柔らかかった。

手の平と唇で触れた肌の温もりと香りまでが、リアルに思い出さ

れる。

ヤバイ。

その気になってきた。

思わず手が伸びる。

ビクリと強張るその態度は、俺が何かすると怯えてるのか。  
だとしたら、半分正解、半分ハズレだ。

しないと言ったからには、無理強いはいしない。

だが、少しでもOKサインが出たら、すぐに頂いてやる。

今は理性を総動員して、長い黒髪を手に取り、先に口づけるまでに留めておくがな。

彼女は、顔だけでなく首筋までを色付かせながら、しかし、俺の行為を咎めはいしない。

前言を撤回して、すぐにもベッドに連れ込みたい欲望を抑え、気を紛らわすためと、純粋な興味と、そしていくらかの下心を持って、俺は問い掛けた。

「荷は届いたそうだが、不自由はないか？」

彼女は紅い顔のまま

「荷は今朝方無事に届きました。ここはなにもかも行き届いていて、不自由など何もありません」

答える。

幼い頃から俺の世話をしている侍女頭の情報によれば、彼女の持ち物は趣味は悪くないが、この国の妃としては少々質素なものらしい。

彼女の国はそれほど貧しい国ではないが、それでも中央から離れている。

華美な調度品などは揃えられなかったのだらう。

「何か必要なものや……いや、欲しいものはないか？」

必要でなくともいい。

お前はどんなものを欲しがるのか。

彼女は首を傾げた。

「欲しいもの、ですか？」

俺はもう一度彼女の髪に口づけながら

「そうだ。贈り物は、気のなさ気な女性を口説く常套手段だろう？」

彼女は、俺を見て

「そうなのでしょうね」

サラツと答えた。

先ほどは物慣れない少女のようだったのに。

こんなところは、歳を相応に重ねた大人にも見える。

「欲しいもの……」

彼女は呟きながら、視線を上に向ける。

「あ、あります」

思い付いたという声が柔らかい唇……これも触れたから事実として知っている……から聞こえる。

「なんだ？」

俺は、身を乗り出して尋ねた。

「この国の歴史書を」

これは、俺の聞き間違いか？

「歴史書？」

あの分厚くて、歴代の皇帝の名やらその功績やらが延々と並べ立ててある、あれか？

「はい」

彼女は頷く。

「そんなもの、どうするんだ？」

彼女はキョトンとし

「どうって……読むんです」

当たり前前に答えた。

それはそうだろうな。

しかし、あれを好んで読むのか？

俺は教養の一つとして一通り読んだが、面白いものではないと思うが。

あまりに想定外だ。

だが、別段問題があるでなく、俺は頷いた。

「明日にでもすぐ運ばせよう。それから？」

女性ならば、宝石でもドレスでも、いくらでもありそうなものだが。

しかし、またもや想定外の言葉が彼女から飛び出した。

「そうですね……庭師の時間を少し頂戴できれば」

庭師だ？

「何故？」

俺の問い掛けに彼女は、少し声を弾ませて

「とてもきれいなお庭ですもの。私の国では見かけない花々がたくさんございましたし、様式も初めて見ました。ですから、いろいろお話が聞けたらと思います」

庭師と庭を散策という訳か？

庭師は、確か30歳ばかりの好青年だったな。

二人で歩く姿を思い浮かべ……無性に腹が立った。

いや、実際はお付きの侍女やらがいて二人きりになることはないだろうが、それでも許し難い。

却下。

が、ちらりと彼女を見遣れば、期待に満ちた視線で、俺の答えを待っている。

これは、応えない訳にはいかないか。

ああ、そうだ。

俺同伴ならば許可。

「分かった。それも近い内に叶えよう」

言えば、彼女はとても嬉しそうに笑みを浮かべる。却下しなくて良かった。

「ありがとうございます」

本も庭も、礼を述べられるほどのことではない。

「他は？」

俺は更に尋ねる。

「他、ですか？」

と、彼女はまたもや上を見つめ

「歴史書を読み終わるまでに考えておきます」

やがて、何も思い付かなかったように、そう言った。

俺はついため息を零した。

欲がないのか、遠慮しているのか。

どちらにしても。

「完敗だな」

白旗を降る。

欲望はなりを潜める気配はない。

彼女への興味は、更に掻き立てられるばかり。

「はい？」

そして。

「高価なものをねだられたら、キスの一つも礼で貰おうと思っていたんだが」

この下心が付け入る隙もない。

「な、キ……？」

彼女はみるみる間に、今までで一番というほどに真っ赤になった。あまりに初々しい反応。

俺は煽られるままに、また、髪に唇を押し当てる。

「私のキスなど……歴史書1ページの価値もありません」

彼女は、真っ赤なままで、ぼつりと言った。

「それを馬鹿正直に受け取れば、あの歴史書を渡した際には、俺はその身体中にキスすることが許されそうだな」

俺は、渾身の理性を以って、彼女の髪を離した。

彼女は怯えたように、俺を窺っている。

「冗談だ」

下心があつたのは事実だが、本気でその身のみを手に入れようなどとは思っていない。

「あんなつまらない本で、お前が手に入るとは思っていない」  
そうだ。

俺は俺の想いで、お前の全てを手に入れる。

「陛下？」

俺は、彼女から離れ、ゴロンとベッドに転がった。

「お休みになられるのですか？」

柔らかな声が尋ねてくる。

「ああ」

俺は、隣のシーツををポンポンと叩いた。

彼女は、俺の手の動きを眺め、何かを思ふのか、黙り込んだ。

「何もしないから、こちらへ来い」

また、辛い約束を口にする、彼女は、はつとしたように

「申し訳ありません。陛下を疑っている訳ではないのです」

言つて、俺の隣に横たわった。

柔らかな布地が、彼女の体の線を無遠慮に描く。

俺は、急いで目を伏せた。

「おやすみなさいませ」

昨晚と同じように。

10年前と同じように、彼女がその言葉を言う。

一瞬しか目にしなかった筈の、白い生地越しの彼女の肢体が、脳裏に散らついて俺の理性に挑戦してきた。

俺は頭の中で、彼女が願った歴史書の内容を、最初から唱える。

第一代皇帝……名は。功績は。

八代までたどり着いた頃、隣の呼吸が穏やかで規則的なものになっていることに気が付いた。

目を開ければ、夢ではない女が眠りに就いていた。

俺は、そっと小さな体を抱き寄せる。

現実。

俺はようやくこの女に手が届いたのだ。

まだ、完全に手に入れてはいないが。

今はこれでいい。

今はな。

言っておくが……いや、変に警戒されても困るから言わないが…

…こんな余裕を俺が持つていられるのも、そうそう長くはないぞ。

近いうちに、必ず、お前の心も体も手に入れる。

覚悟しておくんだな。

## その2（後書き）

サクサクと書いた前作が、意外にもお気に入り登録をして頂けた方や、感想を下さる方がいらっしまったので、続きを皇帝側の視点で書いてみました。

こちらもお気に召していただければ幸いです。

### その3

とある昼下がり。

ここは後宮にある私の部屋から続くテラスの一角。

いいお天気なので、テーブルと椅子を設えて貰って、午後のティータイムの真っ最中。

居心地がいいとは言えないここでの生活の中、ホッと息をつくー時、の筈なんです。

でも、どうしても、向かい側には皇帝陛下。

つく息も、幾分控え目になってしまい、代わりにため息が漏れそう。

そんな私の気分を知ってか知らずか、陛下はのんびりとお茶を召し上がっている。

陛下とのティータイムは、これが初めてではないから、妙な緊張はないけれど。

というか、私が、こちらに輿入れしてから、早いもので一週間が経つが、ほとんど毎日昼食かお茶のどちらかは一緒に下さる。

ついでに、夜も一週間の間に、四日もいらっしまったのよね。

もちろん、何もしないで、眠っていかれるだけだけど。

慣れもするわ。

でも、そんなに後宮にいらっやっていていいのかしら。

お忙しい筈の方だもの。

無理をされているのではないかと少し心配もしている。

この陛下の行動が、私に本気を分からせる、というそれに起因しているなら、なおさら、なんとかしなくてはいけない気になってくるのだけど。

今のところ、陛下の本気とやらは分かっていない。

「……果物は嫌いか？」

悩みがちな私に、不意に、陛下がお尋ねになる。

何かと尋ねられることが多い気がするの、私がここで不自由しているように見えるから？

だったら、さっさと国に帰して下さればいいのに。

こう思う私は、かなり後ろ向き。

反省しなくては。

と、陛下のご質問はなんだったかしら。

そう、目の前のきちんと皮を向いて、鮮やかに盛り付けられている果実達のこと。

「嫌いではないのですが」

料理人が手をかけてくれるものを残すのは、申し訳ないと思う。

でも、皮を剥かれて時が経ち、瑞々しさを失ったそれらをどうしても口に入れる気にならない。

「が？」

陛下に促されて、私は正直なところを答えた。

「田舎育ちなものですから、もぎたて、剥きたてが好きなんです」  
そうなのだ。

私の実家では、庭に果実の樹木がたくさん植えられていて、直接もいで食べたり、なんて普通だった。

「ああ」

陛下は納得したように頷いた。

「田舎育ちかは、ともかく……お前の城は果実園のようだったな」  
え？

陛下は私の実家をこ存じ？

これは意外。

陛下は、私の驚きを笑みで流し、近くにいた侍女の一人を手招くと、何やら命じた。

「陛下は……私の国にいらっしゃったことがあるのですね」

侍女が礼をして去るのを見届けてから、尋ねた。

「本当に覚えてないんだな」

陛下は視線を少し下げて呟かれた。

う。

この方の、これ、ずるいと思う。

常に威風堂々とされた方が、ふと見せる寂しげな様子は、ひどい罪悪感を抱かせるんだもの。

「……いつ頃でしょう？」

思い出す努力をしようと、尋ねたのに。

「思い出すまで、教えん」

それ、おかしいです。

思い出したら、聞く必要ないじゃないですか。

私が困っているのが楽しいのか、陛下のしょんぼりはどこかに行ってしまった。

目にするたびに、そこだけは年相応だと思わせる、悪戯っ子のよ  
うな笑みを浮かべた。

謎は残ったままだけど、そのことにはホッとする。

私のために、陛下のお心を煩わすなんて、やはり心苦しいもの。

「お待たせいたしました」

ほどなくして、私の目の前には、皮の剥かれていない様々な形の  
果実が並べられた。

そして、無造作に差し出されたのは小さな短刀。

「使え」

陛下は、実にあっさりと私にそれを手渡された。

「もぎたては無理でも、剥きたては可能だろう」

それはそうでしょう。

でも。

私は手渡された装飾の少ない実用的なそれを見つめた。

「どうした？」

「後宮は刃物厳禁と聞いております」

ここで刃を手に出せるのは、皇帝のみだと聞いている。

後宮を取り巻くように立っている衛兵はもちろん剣を携えている  
が、一つしかない後宮への入り口を通る者は身分に関係なく、厳し

い検査を受けて、刃物を持っていないかを確認される。

もちろん、私もその検査を受けたし、その時に小さな糸切り鋏でさえ持ち込んではないと、きつく言い渡された。

「こんな小さなもの構わないだろう？」

そうは言われても。

私が固まっていると、陛下はクスリと笑い。

「俺がここにいる間、貸してやる。終わったら、俺に返す。これでどうだ？」

そんな風におっしゃる。

それなら、いいのかしら。

詭弁に思えなくもないけれど、でも。

「お借りします」

せつかくのお申し出を、私は受け入れることにした。

お借りした短刀を鞘から抜き、運ばれてきた果実を一つ手に取る。どこかで冷やしてあったのだろう。

とてもひんやりとしている。

すると皮を剥き、一口サイズに分けて皿に乗せる。

「器用なもんだな」

「ありがとうございます」

ひとかけらを口に入れた。

冷たい。

そして、みずみずしくて。

さすがは帝国に運ばれる極上品の味は素晴らしい。

満足して果実から目の前の方に視線を戻すと、陛下がじっと私を見ている。

もしかして、召し上がりたい？

私が剥いたものなど、お勧めしてよろしいのかしら。

「召し上がりますか？」

おずおず聞けば、陛下は頷いて口を開けた。

よく弟妹にも、こうして分け与えていた私は、あまり深くを考え

ず、そこに一欠けらを運ぶ。

「確かに、うまいな」

同意を得られて、つい笑みがこぼれた。

「これも」

陛下が今しがた口にされたものとは違う果実を手に取り、私に差し出す。

これはつまり、剥けということかしら？

受取り、皮を剥き、そして皿に盛って陛下の前に。

ところが陛下ときたら、また口を開けて、待ちの態勢。

小さな子供のお相手をしているようだわ。

私は先ほど同じように、果実をそこに運んだ。

陛下がご所望の果実はとても果汁の多いものだ。

望まれるままに幾度と陛下の口元に運ぶ動きを繰り返すうちに、果汁が滴り、手首を伝う。

あ、と思うと、陛下の唇がそれを追った。

え？

これは何事？

一瞬、硬直したものの、私は慌てて手を引いた。

でも、ぐつと力のこもった手の平に握られた手首は、僅か揺らいただけで捕われたまま。

陛下は、果汁を追うように私の手首から肘に唇を這わせ、しかも。

「……っや……」

戯れるように、時折舌で嘗め上げた。

なぜ……どうして、急にそうなるのですか。

この一週間、何もしないと約束なさってから、そんな素振りは少しもなかったのに。

眠る時だって、小さな子のように、シーツをポンポンと叩いて……

……あら？

今、何か思い出しかけた気が……って。

「……っ陛下！」

果汁を滴らせた指を、唇に含まれて舌を絡められ。

気のせいじゃなく、背筋がゾクリとして、私は半泣きで陛下を呼んだ。

陛下は、ようやく指を離し、唇の端を上げる。

先ほど見せた、悪戯めいたような。

でも、どこかに妙な色香を漂わす。

いったい、貴方は。

子供なの？

大人なの？

「いつになったら、俺はお前を味わえるんだろうな」

手を捕らえたまま、陛下は私をじっと見た。

また怖い、睨みつけるあの視線。

「……このような極上品を口に慣れた方に、古びた果実など……」

情けないが、声が震えている。

はつきり自覚できるほど、瞳には涙が浮かんでいるし、きっと顔

は紅い。

「俺には……未だ枝について、摘まれるのを待っているようにしか

見えんな」

人が殺せるのではないかというような強い視線に射抜かれて、も

う何も言えない。

どれぐらい時間が経ったのか。

ふと手首が解放された。

「時間切れか」

そう言っ、陛下が立ち上がる。

ストンと体の力が抜けて、私は、その時になって自分が息をする

のも忘れて、陛下の瞳に見入っていたことに気がついた。

「今夜はお前の部屋には行けそうにないな」

陛下が苦々しげに見やる先には宰相が、早くしろとばかりに待ち

かまえている。

「行つてらっしゃいませ」

なんとか、気を取り直し、立ち上がり見送る態勢。

ここはさっさと立ち去ってもらって、気を落ち着けたいところ。  
「ああ……行つて来る」

陛下が頷きながら、寛がせていた衣服を直そうとされているのに  
気がつき、私はほとんど反射的に手を伸ばしてその衿元を整えた。

「お妃様」

侍女に声をかけられて、はたと気が付く。

しまった。

こういうことは、本来、侍女の仕事だわ。

これ、弟妹が多い長女の性だと思う。

何せ私には母親の違つ者も合わせれば、妹9人と弟7人がいるの  
だ。

もちろん、世話をしてくれる侍女も乳母もいたけれど、それだけ  
大人数が一堂に会すると、手が回らないことも多くてついつい手を  
出してしまっていた。

でも、ここではそんなことする必要ないし、むしろはいけな  
いのよね、きつと。

「申し訳ありません」

しかし、手を引こうとすると、また手首を掴まれ

「続ける」

命じながら促すように胸元に手を導かれる。

良いの？

いえ、別にしたい訳ではないですよ？

側に控えていた侍女頭に問いの目線を向ければ、咎める風ではな  
く、ニコリと微笑んだ。

どうやら許可らしい。

仕方なく、私は陛下の上着に手をかけ、ボタンを嵌めていく。

なんか……ちよつと……つい、指先が身体に触れたりすると、変  
な感じなんですけど。

ボタンを嵌め終え、皺を伸ばして。

結局、すべての身繕いを終える。

「今度は、俺が手伝ってやる」

はい？

何をですか？

着替え？

そんなの不要ですけど。

頭上からの声に、私は疑問符を頭に浮かべて、顔を上げた。

「脱がす方を、な」

陛下は身を屈め、私の耳元に囁くと、ついでのように頬に唇を掠めて離れた。

は？

何？

えーと、脱がす……？

「……っな……」

私が陛下の言葉の意味を察したのは、既に陛下が部屋を出ていき、更に侍女達も片付けなどでいなくなってからだった。

「……もう、や……」

私は、思わずその場にへたりこんだ。

心臓がバクバク跳ねあがる。

陛下が唇と舌で触れた私の指や腕が、急激に熱を帯びてくる。

キスが掠めていった頬に至っては、今そこに炎を灯しているように熱い。

なんだか。

もう。

初恋の君などというのは幻影で、私がいかにつまらない女かを陛下がお気づきになるまで、こんな心臓に悪いやり取りが続くの？

何かあるたびに、ああやって陛下は私に戯れられるの？

人生25年、何の免疫もなく過ごしてきた身には、刺激が強すぎます！

こんなの、身が持ちません。

「ああ、もう……するなら、なさっちゃって下さいって感じですよ」  
侍女頭あたりが聞いたら、喜び勇んで準備しそうな私の言葉は、  
幸か不幸か誰に聞かれることなく、爽やかな青空に消えて行ったの  
だった。

### その3（後書き）

結局、書いてしまいました。

このまま続けるとなると、いつまでR指定なしでいけるのかが、一番の心配です（笑）

## その4

やはり、今夜もお前はその顔をするのだな。

少しばかり首を傾げるようにして、俺を見上げながら。

不思議そうな。

困ったような。

様々な感情の入り混じった、なんとも複雑な表情。

俺を厭うている、という訳ではないように思える。

それに幾らかの安堵を感じながら、しかし、決して救いにはなり得ないのだと、沈む心が教えてくれる。

数多くの感情が交錯するその表情の中には、喜びだけは僅かばかりもないのだから。

いつかは、これが嬉しさに満ちた笑みに変わるのだろうか。

そうしてみせると毎晩のように誓ってはみるものの、今晚もその兆しさえ見えなかったことに、落胆を覚えざるを得ない。

つつい漏れそうになるため息を、努力で身につけた理性で押し止めたその時だ。

「お帰りなさいませ」

その言葉が、俺の沈んだ心を拾い上げた。

まったくもって、絶妙過ぎるタイミングだ。

じっと見下ろすその先で、彼女はようやくのように、俺が愛して止まない優しい微笑みを浮かべた。

まだまだ、嬉しさに溢れたとは言い難いかもしれない。

それでも、俺を受け入れ、暖かく迎え入れようという意志の感じられる笑み。

お前のそれは計算か？

だとすれば、相当な手練だ。てだれ

俺は年上の女にいいようにあしらわれる、愚かな男にもなるうな。そう頭では考えることができて、頬が緩むのを止められない。

その一言と、この笑みが、冷静であろうとする俺を有頂天にさせる。

『お帰りなさいませ』

彼女がその言葉で俺を迎え入れたのは、三日目の晩。

以来、俺がこの部屋に足を踏み入れれば、必ず彼女はそう言うて迎える。

この後宮において、その言葉で俺を迎えるのは、彼女だけだ。

彼女の世話係兼教育係でもある侍女頭には、彼女にあれこれと言わぬようにと念を押してある。

俺はこの後宮のつまらぬしきたりで、彼女をがんじがらめにしたくはない。

たとえそれがこの後宮にそぐわぬものだったとしても、彼女が彼女であるが故の様々なものを、俺の側に置くがために奪うなど許せるものではない。

10年も前に少女であつた彼女に幼い恋心を抱いて、それを忘れられぬままに手に入れたとは言え、彼女があ那时的少女のままであるうなどとはもちろん思つてもいない。

時は過ぎたのだ。

俺が変わつたように、彼女も変わつただろう。

しかも、彼女の方は、既に大人となつてから時を経ており、完成されている一人の女として、存在している。

俺は、過去にはなかった現在の彼女を認めたい。

そんな彼女の存在を歪ませるようなしきたりならば、なくしてしまえば良いのだ。

そのような俺の考えから、本来ならば侍女頭から聞かされるべきであろうこの後宮の数々の慣習を、彼女は耳にしていない筈だ。

だから、この後宮において、部屋を訪れた皇帝を『お帰りなさいませ』と迎える慣習のないことを、彼女が知らぬのは何の不思議もない。

そして、現れた今はまだ名ばかりであろうとも夫である俺を、彼

女が彼女の国の慣習に則り『お帰りなさいませ』と迎えることも当然なのかもしれない。

それだけのことだ。

それ以外の意図など、彼女には何一つないと分かっている。

それでも、俺が帰ってきたと、ここが俺の帰る場所だと認められているようで、なんとも言い難い幸せを俺にもたらすのだ。

些細なことだと、人は笑うだろうか。

しかし、俺は今後、誰にその言葉を許すことはないだろう。

「ただいま」

そして、俺がこう答えるのも、彼女にだけだ。

俺が帰る場所は、お前のところだけだ。

お前の在るところ、お前自身が俺が戻る場所なのだ、と。

俺の返事には、確固たる意志がある。

もつとも、それもまた、彼女の知らぬことだろう。

「……お仕事ですか？」

いつもの挨拶に満悦しつつ部屋に入ると、彼女は俺の手元を見て尋ねてきた。

「いや、違う」

両手を塞ぐ数冊の書物のことだろう。

こんな大量の執務を後宮に持ち込まねばならん程、俺は無能ではない。

それに、万が一にも執務を滞らせたとして、まかり間違っても、

お前の部屋に持ち込む訳がなかるう。

執務の片手間にお前が口説けるか？

「所望の歴史書だ」

いろいろ浮かんだ言葉を、口に上らせることなく、俺はそうとだけ答えた。

とりあえず、と身近なテーブルの上に置く。

さて、希望の品を前に、愛しい正妃殿は、どんな喜びの表情を見せてくれるのか。

そんな期待を持って、そちらを見遣ったのだが。

「陛下がお持ち下さったのですか？」

彼女の表情は驚きばかりで、僅かな喜びもない。

大きく瞳を見開いて、俺を見つめる様は愛らしくないとは言わないが、しかし、それは期待したものではない。

俺は、彼女の様子に不審と不満を感じながらも、持参が遅れた訳を口にする。

「もう少し早く持ってきたかったのだが。司書が融通の聞かない男で、これは書庫からの持ち出しは厳禁だと……」

彼女は聞いているのかいないのか。

俺から書物に視線を移し、そのまま微動だにしない。

「おい？」

声をかけると、はっとしたように再び俺を見上げた。

やはり、嬉しい風ではない。

喜びの笑顔を誰に見せるのも腹立たしく、だからこそ、俺が持参したのだぞ。

俺の帰還ではなく、書物を喜ぶ笑みでもいい。

それでもお前の嬉しそうな顔が見たいという、そんなささやかな願いさえも叶えられないのか。

「なんとお礼を申し上げてよいのか」

彼女は俺がこの部屋に入ってきたときより、一層困ったような表情をする。

がっかりだ。

こんな顔が見たかった訳ではない。

「俺の思惑どおり、キスでもしてくれるか？」

大きく落胆しつつも、この困った表情をなんとかしたいと、そんな戯言を口にする。

頬を紅く染めて俯く姿が見ることができれば、俺の子供じみた苛立ちは消える筈だ。

だが。

「……それで私の感謝の意が伝わるなら」

彼女は僅か俯きながら、静かな声でそう告げた。物慣れぬ中にも、年上然とした物静かな所作が優雅にさえ見える。その作り上げた態度に、少しばかり、いや、かなり腹がたった。分かつているのか？

俺はお前が好きなのだぞ？

そんな風に、取り繕った態度で礼を言われたかったのではない。形ばかりの口づけが欲しくて、司書を説き伏せ、重い書物を運んだ訳ではない。

「ならば、遠慮なく」

俺は、尖った気持ちに突き動かされて、乱暴な動作で目の前の華奢な身体を引き寄せた。

彼女はよろめいて、俺の胸元に倒れ込んでくる。

更に腰を強く抱き寄せて、わざと艶っぽく身を密着させた。

薄手の布地越しに俺が彼女の体温を感じ取るように、彼女もまた俺の熱を感じ取っている筈だ。

俺の胸元で縮こまり、声も出さずに、ただ俯くばかりの小さな顎を指先に捕えて、顔を上げさせた。

俺のあからさまな動作に、慣れない彼女が平気な振りなどできる筈もない。

上げさせた顔は、みるみる間に紅に染め上がった。

だが、それでも、彼女は俺の乱暴を責めることもなければ、抗いもしなかった。

大人しく俺の腕の中に納まっている。

それが、俺の苛立ちを煽った。

そして、片隅で少しばかり冷静な俺が問いかけてくる。

俺は、彼女に、拒んで欲しいのか？

「逃げないのか？」

呟きながら唇を寄せれば、抱いた身体は戦き、強張るも、やはり逃げはしない。

俺は、彼女に唇が触れる寸前で動きを止めた。  
どうして、そんな風に強張りながら受け入れようとする？

俺の戯れを、半泣きで咎めるのが、常のお前だろう？

俺は……お前に何を強いたい訳ではないのに。

程良い暖かさを伝えてくる肌の温もり。

湯に浮かべられていたのであろう花びらと、彼女自身のものとが、  
混じり合った甘い香り。

自覚のない誘惑に惑わされそうになりながらも、俺は、かなりの  
忍耐を己に強い、彼女を探る。

「何か言われたか？」

一番に思いつく問い。

俺が彼女を抱いていないと知っている者は数少ない。

その者達は俺の想いを知り、そして俺が信頼する者達ばかりで、  
誰が彼女に何かを言うとも思えない。

しかし、むしろ、心ある者だからこそ、この状況を憂い彼女に進  
言する者もあるかもしれない。

彼女は、じっと俺を見つめる。

「……いいえ」

囁きで返る言葉に、嘘はなさそうだ。

静かな答えにも揺れる空気が、唇を掠めて、俺を誘う。

このまま、口づけてしまおうか。

欲を抑えて、また問う。

「では……俺の本気が分かったとでも？」

俺は、いつも彼女に問い掛けてばかりだ。

小さな子のように。

あとから、あとから溢れる問いを口にする。

それは、不安が俺に蔓延っているからに他ならない。

ここにいるのは厭ではないか？

俺を嫌っていないか？

そんな風に。

不安に煽られて、問いは零れ落ちるのだ。

「……はい」

彼女は少し間を置いて、俺の問いにコクリと頷き答えた。

しかし、今度はふと視線が逸らされる。

ごまかし。

「嘘が下手過ぎるな」

嘘であっても、信じた振りをして、奪ってしまえば良いものを。

俺はこんなに馬鹿正直な男だったのか。

自らに呆れる。

そして、彼女は少し決まり悪げに唇を噛み締めた。

引き攣れて、強張るそれを、俺の唇で解き、その内までを貪り尽くしたい。

そんな衝動を、俺が抑えているなどとは思っても寄らないように、彼女は揺れるセピアで不安げに見上げてきた。

「ですが……私はここに妃として参りましたもの。陛下がお望みなら……」

強張りながら言うそれは、俺が必死に保っている理性に、直接的な揺さぶりをかけてきた。

俺が望めば。

お前は、今度はおとなしくその身を委ねるのか。

腕に抱いた彼女の柔らかさが、その瞬間をいとも簡単に俺に想像させる。

彼女への意趣返しのもりで抱き寄せたことを、激しく後悔した。

「最初の夜のこと……お許しくださいませ。己の身を弁えず、陛下を拒みましたこと……悔いております」

彼女の指が震えながら、俺の胸に添えられた。

細い指先がキュツと、衣を握り、そこに皺を刻んだ。

初めての彼女からの……拙い誘い。

ぐらぐらと今にも崩れ落ちそうな理性。

煽られた欲望が、何を迷うかとばかりに暴れ始める。

抗い難い衝動に、気がつけば妃である女性を強く抱きしめていた。彼女はびくりと震えたが、やはり逃げない。

「俺はお前が好きなのだ」

このまま、閨に彼女を連れて行くのはたやすい。

彼女は今度こそは、俺を受け入れるだろう。

だが、それは違うのだ。

「陛下」

おずおず、という動作で背中に彼女の手が触れる。

滑稽なほどに身体が疼き、抱き寄せた時の彼女のように、いやそれ以上に身震いした。

寝台まで、移動することも煩わしい。

いつそ、この場で。

そんな考えを、打ち払うべく、俺は大きく息をついた。

「陛下？」

彼女はきちんと教育された一国の王女だ。

輿入れから半月あまり。

気持ちがちが落ち着くに從って、俺が何者で、己がいかなる立場であるかを思い出したのだろう。

だが、俺がお前に望むのは、そんな覚悟ではない。

「お前にも望んで欲しいのだ」

声は、情けないほどに、感情が滲み出ていた。

欲望。

焦燥。

憤怒。

それから悲哀。

「俺がお前を欲するように、お前にも俺を欲して欲しい」

これは、我が儘だろうか。

皇帝ではなく。

正妃ではなく。

一人の女として、一人の男である俺を望んで欲しい。

俺の腕の中、彼女は固まったまま。

「立場で差し出されるだけの身などいらん」

そう言いつつも、抱き寄せた身体を離せない。

十年前、彼女のドレスの裾を握って、離せなかったように。

欲望を覚えた分だけ、性の悪い。

俺の自身は、だだをこねる子供のままだ。

「俺は、お前の全てが欲しい」

それでも、離せない。

望まずにはられない。

やがて、彼女は背に回した手を解いた。

そつと、しかし彼女が意志をもって、自ら離れたならば、俺はなす術もなく解放するしかない。

「陛下」

彼女は俺の背から離れた手を、少しさ迷わせ、そして意を決したように俺の胸元に置いた。

「申し訳ございません」

そしてその手の平に額を乗せて、俺に詫びる。

伏せられた頭を見下ろし、己が背丈だけは彼女に追いつき、遙かに追い越していることに苦笑いが零れた。

「詫びる必要などない……お前の立場であれば当然だ」

身体だけでなく俺という人間自体も、お前の心遣いを受け止めて満足できるほどに大きくなることを目指したのだから。

いくら、努力を重ねたところで、この想いの前では、全てが無と化す。

「俺は昔も今もお前を困らせてばかりだな」  
情けないことに。

俺は、彼女に腕を回すこともできず、ただ立ち尽くす。

そんな姿もまた、きつと、10年前の俺のように違いない。

彼女は、不意に顔を上げた。

じつと俺を見つめる瞳が、ふと和む。

「手掛かりを一つ下さいましたね」

何のことだろうか。

「十年前にも私を困らせた8歳の男の子が陛下なのですね」

彼女の声には幼い子が無邪気に勝ち誇るかのような響きがあり、俺はつい笑みを零した。

「……そうだ、随分とお前を困らせた」

場を和ますために、敢えてそんな風に言っただのである。彼女に救われ、俺もそう答える。

彼女は、微笑んだ。

そして、微笑みのまま。

「……立場は忘れます」

言った。

聞き間違いかと、俺は彼女を見つめ返した。

「私の立場も、陛下のお立場も忘れて、きちんと陛下を見てみます」  
聞き間違いではない。

彼女は確かに言っただの。

立場を忘れると。

「ですから、もう少し……お時間をいただけますか？」

時間をくれと。

それは、俺の言葉を理解してくれた証に違いなく、更に否定でも拒否でもない。

「ああ……いいだろう」

答えて、俺は彼女から離れた。

そして、寝台ではなく、扉へと向かう。

「陛下？お休みにならないのですか？」

この状況で？

お前の横で眠れと？

振り返り、彼女を見遣れば、純粹な疑問を浮かべた瞳と出くわす。  
この問い掛けがすなりと出てくるところに、まだまだこの妃と俺の間には、大きな乖離があると思ひ知らされる。

「今夜は他で休む」

苦い思いを抑え切れない俺の笑みは、彼女にどう見えるのか。

「不用意に触れ過ぎた」

これ以上は、今夜は無理だ。

ここで休むことなど、できる筈がない。

しかし、俺を煽った本人は何のことかと首を傾げるばかりだ。

年にすぐわぬ無頓着さが、愛しく、そして、またも少しばかり腹立たしい。

「お前に欲情している。今、お前と寝台に上がれば、俺は間違いなくお前を抱くだろう」

俺ははつきりと告げた。

そつ、それは確信だ。

どんなに、お前が拒もうと。

どんなに、後で自ら後悔するとも。

自らの心を裏切つて、俺の身体は暴走し、お前を組み敷くだろう。だから、ここでは今夜は眠れない。

彼女の頬が、俺の言ったことの意味を理解したことを示す色に変わる。

「また、明日」

何も言えずに俯いた彼女に背を向け、扉を開けた俺に

「あの」

彼女の声。

俺は、再度振り返った。

そこに見たのは。

「書物をお運び下さり、ありがとうございました」  
望んだ笑み。

俺の戯言で染め上がった彩りを、その頬に留めつつも。

「明日からが楽しみです」

嬉しいと、楽しみだと、素直な感情に溢れる表情に、俺はしばし見入った。

「陛下？」

呼ばれ、はっとし取り繕う。

「庭の案内も近いうちに必ず叶える」

言えば、彼女は更に嬉しげに頷いた。

「楽しみにしています」

お前……その笑みは、殺人的だろう。

今すぐ彼女を抱き上げ、寝台に攫いそうな己を抑え込み、俺は彼女に背を向けた。

「おやすみなさいませ」

「ああ、おやすみ」

頬へのキスさえできず、俺は急いで部屋を出た。

頭を、身体を、冷やすために。

後宮の廊下を速足で進み、案内すると約束した庭へと出て、ようやく歩みを緩める。

咲き誇る華やかな彩りさえが色褪せて見える程に、妃の笑みが俺を凌駕する。

全力で走った訳でもないのに、未だかつてなく心臓が煽っていた。俺はいつたいなんなのだ。

ああ、そうだった。

あの妃の前では、俺はこの国の皇帝ではなく、ただの恋に堕ちた男に過ぎないのだった。

もつとも、それは不快ではないのだが。

とはいえ、この燻り続ける身体の熱は、どうしたものか。

どんなに身体が猛つていても、彼女の名残の温もりを、他の女で消す気などない。

仕方がない。

執務室にでも戻るか。

初心に帰って、夜通し執務に明け暮れるのも悪くないかもしれない。

い。  
どんなに足掻いたところで、どうせ、今夜は眠れないのだから。

#### その4（後書き）

正妃からは、余裕で口説いて見える皇帝ですが、実は内では日々葛藤しておられる訳です。この正妃との温度差は、埋まるのでしょうか???

## その5

嫁き遅れという称号を手に入れて早幾年。

そろそろ修道院にでも行くことを考えた方が良いのかしら、なんて思案し始めていたところに舞い込んできたのが、この輿入れのお話だった。

常に温和な笑みを浮かべている父王が、珍しくも真剣な顔で「輿入れ先が決まった」と言うから、老い先短いどこぞの貴族の後添いにでも決まったのかと、神妙に待つ私の耳に届いたのは信じられない国名だった。

いやいや、まさか。

私の頭は即座にそれを否定した。

似た名前の辺境国に違いない。

絶対に、そう。

だが、しかし、父王の隣に立っている、娘の性格を知り尽くした母が、私の思考を見越してきっぱりと言い切った。

「……そのまさか、の大帝国ですよ」と。

私の思考は、一瞬停止した。

その後、一気に頭を巡るのは、かの国のお国事情。

確か、あちらは先日、先帝が位を退かれ、新しい皇帝が御即位されたばかりの筈。

とすると、あれですか。

寂しい余生を少しばかり楽しくするために、先帝が新しい側女を……。

「……輿入れするのは、先帝ではなく現皇帝です」

私の浅はかな考えもまた、鋭い母にあっさりと否定される。

現皇帝？

それこそ、まさか、でしょう。

先ほど御即位された新皇帝といえば、その手の話に疎いらしい私にさえ聞こえてきている御方だ。

先帝も賢帝と名高い方であらせられたけれど、それに劣るところのないばかりか、皇太子の頃から既に父皇帝を凌ぐ力量を迸らせていらつしやった方だとか。

しかも、侍女達のかましい噂によれば、かなりの美丈夫らしい。いや、能力も容姿も、不敬ながらこの際どうでも良い。

かの御方は、確か。

「18歳になられ、正妃を迎えられることになり、お前を是非にご所望とのことだ」

そう！

18歳！

私よりも7つも年下でいらつしやるのだ。

って、ちよつと待って。

聞き捨てならない単語を、今、父は口にしなかった？

「……せ、いひ？」

せいひ……正妃。

つまり、正妃！？

「あり得ません！」

私は作法も礼儀も吹っ飛ばして、叫んでいた。

数多くいる側女の一としてならば、物好きに年増の一人も加えようと考えることもあるかもしれない。

でも、正妃って、普通は一人。いくら大国でも、そこは違わないでしょう。

そのたった一人に私を据えようって、それはあり得ないでしょう。私の個人的資質は言うに及ばず、国力からしても分不相応だ。

「これは既に決定事項なのだよ。断ることは許されぬ」

父が無情にも言い切った。

それはそうでしょうとも。

我が小国ごときが、大国からの恐れ多くもありがたいこのお話を

断れる筈がない。

でも、ですね。

お父様、分かってますか？

私、今年で25歳ですよ。

先日、13歳で嫁いだ妹姫より、はるか12年も長く生きている身です。

今更、どんな顔して大国の正妃に……それも、7つも年下の皇帝に嫁げと？

「……使者の方によれば、万事かの御国でご準備頂けるとのこと。お前の身一つ以外、何もいらぬ故、早々に国を発つ準備をせよ、とのことだ」

つまり、あと必要なのは、私の心構えだけってことですか。

そんなもの、10年前ならあったかもしれません。

でも、今はありません。

しかも、年を取ると柔軟性もなくなるんです。

心も頑固になってしまっんです。

だから、急に、そんなことを言われても、無理。

上辺だけでも、にっこり笑ってお受けします、なんて絶対言えませんが。

怒りたいやら、泣きたいやら。

父王は私の視線を受け止めきれないように顔を逸らす。

意気地なし。

その隣で、どうしてか微笑んで、私を見つめる母。

どうして、呑気に笑ってるんですか！？

声に出さない私の思いは、やはり鋭い母には伝わったようだ。

「ありがたいお話ではありませんか。かの御方は……」

「これ」

宥めるように何かを言いかけた母を父が遮る。

「とにかく、これは決まったことだ。3日後には使者の方と共にここを発つことになる」

それは、また随分と急ではありませんか。

これ以上、年取る前にさっさと旅立てということですか？

ああ、なんてこと。

こんなことなら。

「……とつとと修道院に行っておけば良かった」

そちらの心構えの方がよほどできている。

私の呟きが聞こえた母が何か言いたげに、だが、結局何も言わずに優しく微笑んで抱きしめてくれて。

私は、もう何も考えたくなくて、幼子のように母の胸に顔をうずめて目を伏せたのだった。

それから、あれよあれよという間に準備は整い……正直、大国に正妃として輿入れするなんて大事の準備を、随分と戸惑いなく進められるものだと思っていたのだけど、それは、この国に来て理由は分かった。

この輿入れの話は私の耳に届いていなかっただけで、10年も前からあった訳だものね。

準備だけは、着々と進めることができていたのだ。

私だけが訳が分からず置いてきぼりにされる中、あつという間にこの国に到着し、結果として形ばかりとなった初夜を過ごし……現在に至る。

「はあ……」

先日、私は意を決して陛下の寵を受け入れる意思を見せた。

いろいろなことはさておき、私はここに妃としてきたのだから、その責務は果たすべきだと思ったの。

こんな年増を、初恋という幻想とは言え、思し召しならばありがたいことだと思ったの。

どうして誘えば良いのか分からないながらも、どういつ訳か事は進んで。

陛下が私を抱き寄せ、口付ける素振りを見せた時には、心臓が止

まるかと思つたわ。

あの端正な顔が息がかかるほどに近づいて来た時は、初夜と同じように私自身のみすばらしさを思つて泣きたくなつた。

それでも、逃げたがる身体を必死に抑えて、陛下の望むとおりにしようとした。

でも。

『お前にも望んで欲しいのだ』

陛下は、動きを止めて、そうおっしゃった。

『俺がお前を欲するように、お前にも俺を欲して欲しい』

それは、いつものような凜と響くお声でなく。

囁く時の甘さもなくて。

ひどく辛そうな、掠れたそれに、私は何も言えず、ただ抱きしめられていた。

『立場で差し出されるだけの身などいらん』

身だけではだめだと、陛下はおっしゃる。

私の心を見透かす言葉に、私の行為がいたく陛下を傷つけたのだと気がついた。

私の不用意な言葉は陛下を傷つけるのだと知った。

それにとても驚かされた。

そして、気がつかずに起こした己の浅はかな行動を、とても悔やんだ。

心が、産まれて初めてというくらいに軋んで痛んだの。

『俺は、お前の全てが欲しい』

そう告げるお声も、痛々しくて。

真摯にお応えしたいと思つた。

私にとって、陛下は今はまだ一人の男性ではない。  
名ばかりの夫。

大国の皇帝である御方。

どれも、立場として与えられたものに過ぎない。

陛下が私に望まれるのはこれらを取り払って、あの方自身を見よ

とそういうことなのだと思う。

だから、私は陛下にお約束した。

陛下をきちんと見てみると。

皇帝ではない、私を好きだという一人の男性として見ようと。

でも、そうしたら、私はあることに気がついてしまった。

うつん、気がついてしまったというのは違うかもしれない。

そうであることは当たり前なのだから。

なのに、それを思い知ってから、私はどうしたら良いのか少し迷っている。

「はあ」

「随分と大きなため息だな」

そんな風に声を掛けられて、私は自分が盛大なため息をついていたことに気がついた。

いけない、いけない。

今は一人ではないのだわ。

件の日からここしばらく、陛下は私の部屋を訪れることはなかった。

正確に言えば、昼食や午後のお茶はご一緒して下さったけれど、夜はいらっしゃらなかった。

これは、あの件で呆れられて見放されたかと、きちんと見てみるというお約束もこのまま立ち消えかと、正直ほっとしたのだけれど、侍女頭が言うには、少々問題が起こり昼夜問わず宰相相手に話しこんでいらつしやったとのこと。

『ここにいらつしやる時が、陛下が唯一寛がれている時ですわ』

そう言われて、少しばかり嬉しい気がした。

様々なものを背負う方が、少しでもお休みになられることの手助けができるなら。

でも。

『早く夜もごゆっくりとお休みになれることができるとうろしいのですが』

未だ私が本当の意味での妃ではないと知っている彼女が、チクリと言うそれは聞こえないふりをした。

そついうのは、得意だわ。

様々な中傷をやり過ごして、嫁き遅れの日々を謳歌していたのだから。

とにかく、お忙しかった陛下は、ようやく問題がひと段落ついて、今日は一日休養日らしい。

朝も早くに突如現れた陛下は

『寝台を借りるぞ』

言つなり整えられたばかりのシーツに潜り込んでしまわれたのだつた。

時計を見れば、陛下が眠りに就かれてから2時間ばかりが経っている。

「……お目覚めですか？ 何か召し上がられますか？」

私は読んでいた、というか開いていただけで実際は読んでいなかった本を閉じて、寝台に近付きながら尋ねた。

陛下は寝台の上で大きく伸びをしながら

「お前」

私？

が、何？

意味が分からない。

ただ、目の前で伸ばされる体躯のしなやかさに、見惚れてしまったのを誤魔化すように

「もう一度おっしゃって下さいますか？」

お願いする。

「……なんでもない。腹は空いてないが……そこにあるのは何だ？」  
陛下は二度目は口になさらなかった。

妙な笑いを浮かべつつ私の読んでいた本……先日、陛下がお持ち下さった歴史書の横にある水差しを指差した。

「果汁です。甘酸っぱいものですが召し上がりますか？」

陛下が頷くのを見て、私はグラスに果汁を注ぎ手渡す。  
何度か見ている寝起きの陛下。

まだ、眠そうに少しぼやっとながらグラスに口をつける様が、  
変に年相応で私はつい笑みを浮かべてしまった。

「……なんだ？」

不思議そうに見上げてくる陛下に、急いで首を振るう。

「今日はずっとこちらでお休みですか？」

別段、何か意図があつての問いではなかった。

だが、陛下は少々ご機嫌を損ねた。

眠りから醒めたばかりで、まだ皇帝としての権威を纏いきれてい  
ない方は、表情もいつもより分かりやすい。

「だめか？」

寝台に座っているため、私よりも幾分頭が低い位置にある。

珍しくも見上げてくる陛下に、私は首を振った。

「だめではありませんが……ここでよろしいのですか？」

陛下は怠惰に寝台に横になった。

「ここがいい」

シーツに埋もれて、こちらを見遣る様が妙に艶めかしくて、私は  
思わず身体を引いた。

「お前の香りがする」

はい？

しばし、その意味を考えて、思い至つて、私は一気に頬が赤くな  
るのを感じていた。

なんてこと、おっしゃるのか。

「お前の夢を見て、目覚めたらお前がいて……」

シーツの香りを吸い込むように深呼吸をなさる。

「お前が横にいないのが、残念だな」

「……どうぞ、ごゆっくりなさいませ」

これが、並みの男性だったならば、寝台から叩きだしている。

でも、この方をお相手にそんな暴挙が許される筈もなく、私は情

けなくも震える声でなんとかそう告げた。

「俺はここで勝手に休んでいるから、お前も好きに過ごせば良い」

陛下は寝台に肘をつき、そこに顎を乗せて私を眺める。

「……はい。何かございました、お声をおかけ下さい」

陛下が寝台から出る意志がない以上、私がするべきこともない。

私は椅子に戻り、本を手にとった。

こここのところ夜はゆっくりできたのに、いろいろと思うことが多くて思ったよりページは進んでいない。

過去の私なら、これぐらいの本ならば数日で読み終えていたのに。今もそう。

本を開いて、文字を目で追い始めたものの。

「何かご用でしょうか」

ふと、顔を上げれば、先ほどと変わらぬ姿で陛下が私を見ている。気がついてしまった途端、本どころではなくなる。

「いいや」

言いながらも、陛下の視線は外れない。

落ち着かない。

好きにしろなんて言われても、できる筈がない。

私は本を閉じ、勇気を振り絞りながら陛下に近付いた。

「あの」

陛下は態勢を変えぬまま、視線だけで私の動きを追う。だから、見ないでください。

というのを、なんて申し上げればいいのかしら。

「……あまり見ないで頂けませんか」

結局、ストレートにそう願うする。

「何故？」

何故って、恥ずかしいじゃないですか。

だいたい、見るとお約束したのは私の方でしょう。

そう思い、じっと陛下を見つめる。

最近、ようやく陛下が怖くなくなってきた。

初めて謁見が許された際には、怖いと思った視線。

今もその鋭さや強さは変わらないけれど、不思議と怖くはない。こうして、見つめ返すことができるほどに。

「……なるほどな」

陛下はゆっくりと身を起こした。

なんていうか。

優雅。

なんだけど、どこか粗野な空気を纏うよう。

男性という生き物は、皆こつこつ動きをするものかしら。

「あまり見られているのも考え物だな」

「……っえ？」

私は、いきなり手首を掴まれ引つ張られ、あっさりと崩れて倒れ込む。

「あ？」

何？

これは、何？

訳が分からず、反射的に顔を上げれば、驚くほど間近に陛下の顔があった。

私は陛下の胸元に倒れ込んだらしい。

「その気になる」

陛下の腕が私の腰に巻き付き、思いもよらない強い力でご自身の方へと引き付ける。

心臓が跳ね上がる。

体温が急上昇。

それでも、私は広く厚い胸に手を置きはしたものの、陛下の成すがままに任せた。

「逃げないのか？」

陛下が本気なら、いくら足掻いたところで私は敵わない。それに。

「陛下は……お待ち下さるとお約束下さいましたもの」

そうでしょう？

約束を違える方ではないと信じているもの。  
だから。

「……お前は、相変わらず俺の扱いがうまいな」

陛下は、小さく笑いを零した。

『相変わらず』

10年前の私と比べての『相変わらず』だろう。

それは当たり前のこと。

陛下は10年前の私に恋をしたのだもの。

そして、今も10年前の私を想っていらつしやって。

目の前にいる私の中に、恋した者の面影を探す。

それは当然なのだと思う。

思うのだけど。

陛下が過去の私を辿っていらつしやることに気がつくたびに、その一つ一つは小さなものなのだけれど、たくさん心に引つ掛かったままになって、徐々に重みを増してきているような気がする。

だって、もし、10年前の私に恋をしなければ？

きつと、今の私など歯牙にもかけなかったに違いない。

そうなのだ。

この方が恋しているのは、ここにいる私ではない。

この方がお望みなのは、10年前の私。

そして、思う。

10年前の陛下を覚えていたら、今ここにいる私の心は違ったのかしら。

10年前の陛下を思い出したら、この方を見る目は変わるかしら。でも、私は覚えていない。今のところ、思い出す兆しもない。

もし、お約束通りに、今の陛下を見て、今の陛下に想いを寄せてしまったら？

今の私の心は、どこへいけば良いのだろう。

そう考えると、お約束をしたものの、陛下を一人の男性として見

ることは、とても危険なことの気がしてしてくる。

「どうした？」

俯いて自分の考えに没頭していた私は、顔を上げて陛下を見遣った。

どこかで見たことあるようにも思える、深い藍色の瞳が私を見つめている。

「なんでもありません」

答えると、陛下は少し不審げではあつたけれど頷いた。

そして、私の腰を抱いた腕が少し緩まる。

離れるのかと思つたら、ことんと頭が腿の上に乗っかる。

いわゆる、膝枕。

「……やはり、お前の膝は気持ちが良いな」

それも、10年前を辿つていらつしやるの？

目を閉じたお貌に、8歳の少年の面影を探してみたけれど、結局見つからない。

私の目の前にいらつしやるのは、立派な体躯と低い声と落ち着いた物腰を備えた一人の成人男性だった。

今は、このように10年前の想いと、現在のお心が重なっているように見えていても。

いずれ、私が10年前の初恋の少女とは、すっかり変わってしまったことに気がつかれるだろう。

その時に、私の心が迷子になってしまうようなことになりたくない。

年をとると柔軟性もなくなるけれど、回復力も弱まるし、次に行こうという前向きな精神も衰えていくんだもの。

だから、陛下とのお約束を守ることに、私はとても迷っている。

「もうひと眠りできそうだ」

陛下の大きな手のひらが私の手を取り、そこに唇を寄せる。

早くなる鼓動と赤くなる頬を持て余しながら、やっぱりさつさと修道院に行ってしまうべきだったかもしれない、と私は考えていた。

## その5（後書き）

年を経ている分、悩めることも多い訳で。。

まずいよ！ お妃さまがちよっと後ろを向いちやっているよ！  
どうする、陛下！？

## その6

最近、妃の様子がおかしい。

そんなことは、侍女頭に言われるまでもなく、気が付いていた。

何やら、物憂げに考え込むことが増えた。

元々快活に動き回るよりは、静かな場所で本を読んだり手先を動かしたりする方が好きな女性ではある。

少し前にはよく見かけた、日なたに座って何かに夢中になっている姿は、10年前を彷彿とさせ、俺の頬をついついと緩ませたものだ。

しかし、最近は本を開いたままそれを読むでもなく、椅子に座って伏せ目がちに物思い、時折ふとため息を漏らす様をしばしば目にする。

それは間違いようもない大人の女の憂いある姿で、これはこれでひどくそられると言えば非難を浴びそうだが、もちろんその様子が彼女の尋常であるとは思ってはいない。

しかし、気が付いていながら、俺は何も言えない。何もできない。なぜならば。

どうしたのかなど一言尋ねて、『国に帰りたい』とでも願われたらどうすれば良い。

帰す気は毛頭ない。

長い忍耐を経て、ようやく手の届く位置にまでやってきたのだ。手離すことなど絶対にあり得ない。俺の元から辞することなど、間違っても許さない。

だが、あのセピアの瞳で切に請われたら？

俺のことが嫌だと、俺から離れたいと、冷たく言われたら？

俺は、否と言えるだろうか。

いや、それより何より冷静でいることができるかさえ、分からない。

うるたえ、凶行に及びぶやもしれぬ。

そう思うと何も言えなくなる。

そうして、大国の賢帝とはやし立てられる身は、一つの策として思い浮かべることさえできず、ただ、何事もないように振舞うことしかできなくなるのだ。

目が覚めた時、俺は正妃の膝を占拠していた。

彼女は俺に膝枕を呈した時と同じ態勢で、寝台の端に腰かけ、俺をじつと見下ろしている。

俺が目を開いたことに気がつく、どうしてか気まずげに、つとその視線は逸らされる。

視線が逸らされたことは気に入らなかったが、ひとまずは「すまん」

起きあがって、詫びを入れた。

目に入った時計は、既に夜半を過ぎている。

俺がここを訪れてから、2時間あまりもの間、彼女は俺を膝に乗せ身動きの取れない状況だったことになる。

「……何が、でしょう？」

しかし、俺の謝罪の理由が彼女には分からなかったようだ。逸らされた視線が俺に戻り、きょとんと見つめてくる。

「重かっただろう」

こんな風に、ぐっすりと眠ってしまうつもりではなかった。

先頃、10年ぶりに取り戻すことのできた彼女の膝枕は、記憶にあつたそれよりずっと心地好いものだった。

あの後、またも忙しくゆっくりとここに帰ることもできなかったが、その膝枕の感触は忘れ難く、執務室で仮眠を取れば夢に見るほどだ。

だから、久しぶりにこの部屋に帰ることのできた俺は、眠る前に少しばかりとそれを所望した。

彼女といえ、もう少し恥じらい、戸惑うかと思いきや、随分と

あつさりそれを差し出し、俺にその場所を明け渡した。

しかし、10年前の子供だった俺ならばともかく、今のこの身体では、さすがに重かろうと半時ばかりで解放するつもりだったのだ。安眠を望んでのものではなく、彼女の柔らかさや香りに包まれて、さすがに少しばかり疲れたと訴える心身を癒したかったに過ぎない。だが、その疲労は、俺が感じ取っていた以上だったようだ。

極上の心地好さも手伝って、うっかりと深い眠りに落ちてしまつたらしい。

「大丈夫です。慣れてますから」

俺の言葉の意味が分かった彼女は頷きながら、しかし、そのまま聞き流すことのできないことを口にした。

「……慣れてる？」

その言葉は、俺で慣れている、というものではないな？

10年前はさて置いて、俺がお前の膝を枕としたのは、改めて数えるまでもなく、まだ二度目だ。

慣れるはずがない。

癒されて穏やかだった気が、一気に荒ぶる。

お前は一体、誰に慣れる程に膝を貸した？

「はい。よく弟妹のお昼寝に添い寝をしたり、膝枕をしたりしました」

彼女はにこりと笑い、軽くそう答えた。

わざとじゃないだろうな。

俺が彼女の一言に一喜一憂するのを楽しんでいるのではないかと疑いたくなるような会話の流れだが、そういう女でないことは重々承知している。

そんな駆け引きを楽しむ女性でないからこそ、俺はこんなに苦勞しているのだ。

「退屈だっただろう？」

気を取り直して、もう一つ気になることを問う。

久しぶりに訪れた男が、まともな会話もなく2時間も眠りこけて

いたとなれば、女としては愚痴の一つや二つ言いたくもなるのではないか。

「いいえ」

しかし、彼女はこれも大丈夫だと答えた。

「陛下の寝顔をじっくり拝見できる機会なんてありませんもの」  
サラッと云ってくれたな。

「……お前」

俺は顔を覆った。

妙に気恥ずかしいのは、幾度と俺自身が彼女の寝顔に見入ったことがあるからだ。

その時の俺は彼女に申し掛からんばかりの身体を、必死に律している訳だが。

「はい？」

首を傾げて、俺を見つめる様に、そんな情欲の名残は微塵もない。俺は苦笑いのような自嘲のような、そんな笑みを浮かべた。

「俺の寝顔が、退屈凌ぎになったのなら何よりだ」

お前は知らないだろう。

俺は眠りが深い性<sup>タチ</sup>ではない。

むしろ、隣に人がいると眠れないぐらいで、他の妃の元に通っていた時でも、その部屋で夜を明かしたことはない。

薄情と言われようと、共にいて欲しいと請われようと、ことが済めば、さっさと自室に戻る。

そうやって過ごしてきた。

だが、お前の側では眠ることができるのだ。

お前の傍らでは、身体が猛って眠れぬことはあっても、その存在が俺の眠りを妨げることはない。

だから、俺の呑気な寝顔を眺めることができるのは、お前の特権だ。

「退屈凌ぎだなんて……」

俺の戯言に、彼女は困ったというように答え、ふと表情を曇らせ

た。

隠すようにすぐに俯いたが、俺は見逃さなかった。  
なぜ、この会話でその顔をする？

最近、よく見かける憂いを含むそれは、今浮かぶべきものか？

「弟や妹の寝顔を見ていると……どんなに成長していても、小さな頃の面影が浮かぶんです」

お前が膝枕やら、添い寝やらをしてやったという弟妹か。

俺にも随分あっさり膝枕を差し出したのは……まさか、俺は、お前の弟妹と同じか？

たとえ弟妹でも彼女が膝枕をしたと思えば腹立たしく、しかも、彼らと同列に扱われたとあつては、俺は不機嫌にもなるうが、しかし、やはりその言葉の中にも、彼女の表情の理由は見つからない。

「そう思つて陛下の寝顔を拝見したのですが……」

彼女の視線が僅かに上がり、俺を一瞬だけ見た。

だが、すぐにまた俯いてしまう。

「でも、思い出せませんでした」

垣間見える表情はとても切なげで、そそられる、と言つたそれを撤回したいように、胸に痛みを与えながら食い込んでくる。

だが、同時に抱き寄せたくなるのだから、やはり撤回は難しいのか。

「10年前……陛下はどんな方だったのでしょうか」

10年前の俺？

ひ弱な8歳の子供だった。

病弱で、泣くことでしか、何かを訴えることのできなかった脆弱な男児だ。

彼女は、それが知りたいのか。

それを思い出せぬことが、彼女の憂いの原因になり得るのか。  
だが。

「……別に、思い出す必要はない」  
俺は呟いた。

思い出して欲しくない。

その記憶の片隅に、僅かばかりも俺がいないことは、少々寂しい気がしないでもないが、だが、あの貧弱でお前に縋るばかりだった子供は、過去のものだ。

お前には、今の俺を見て、知ってもらえれば良い。

「過去の俺など思い出したところで意味はない」

冷たくも聞こえたかもしれない言葉に、彼女は先程まで俺が頭を預けていた場所で、所在なさ気に指を組んだ。

小さく華奢なのに、あの当時の俺では包みようもなかった手。

だが、迷いなく、その手を掴んで側にいてくれと願った。

今ならば、用意に包み込めてしまえるのに。

幼い頃には無邪気に捉えた手に、何故か今は触れることを戸惑っている。

彼女に振り払われるのが怖くて。

「どうした？」

そう尋ねることしかできない。

彼女は、はっとしたように指を解いた。

何故だ？

何故、そんな顔で、10年前を知りたがる？

「何でもありません」

彼女が顔を逸らし、立ち上がりかけたのを捕らえて留める。

慰めを拒否されるのが恐ろしくて触れられなかった手は、捕らえるためならば迷いなく掴めた。

「そうは見えない」

さすがに、このパターンで幾度と抱き寄せられているだけあって、彼女は身構えた。

しかし、力では俺の方が圧倒的に優位だ。

「……っ陛下！」

腕を引き、倒れ込む身体を抱きしめる。

「お前が見るべきは、今、お前を抱きしめている俺だ」

ぐつと胸元へと閉じ込めれば、小さな身体は強張りながらも、柔らかに存在を誇示する。

「過去の俺などどうでもいい」

彼女の腕が、俺から逃れようとともかく。

無駄な抵抗だ。

今の俺からは、どう足掻いたところで逃れられない。

「陛下は……」

やがて、おとなしくなった妃の掠れて震える声が胸元をくすぐった。

「ずるい」

確かに。

皇帝として、すべからず平等であらんとする俺は、お前に関しては狡いばかりの男だ。

「狡い、か」

だが、仕方があるまい。

どのような手を使っても、俺はお前が欲しい。

しかし、今この時に、彼女が言う俺の狡さとは何だろうか。

「陛下は私には10年前を思い出す必要はないとおっしゃるのに」  
消えてしまいそうな小さな声だった。

俺は聞き逃すまいと、胸元の彼女に顔を寄せた。

「……陛下ご自身は10年前の私をお求めになる」  
なんだ、それは。

「おい」

そんなつもりはない。

彼女は俺の声が聞こえなかったように、独白じみた訴えを続ける。  
「……私には今の陛下を見るようにとおっしゃるのに」

俺は問い掛けようと開いた口を閉じた。

これが、この妃に憂いを与えているものの正体ならば、暴かねばなるまい。

「陛下はいつも10年前の私を探していらっしゃる」

だから、そんなつもりはないのだ。

だが、俺の態度に彼女にそう思わせるものがあつたのだろうか。それに、彼女は傷ついた？

俺は、知らぬうちに、彼女を傷つけていたのか？

「私は…… 10年前の陛下が恋なさつた少女ではありません！」

正妃の声が珍しくも荒ぶり、俺の胸元から顔を上げる。

瞬間、俺は頭が真っ白になった。

「……………泣くな」

間抜けな間の後に、ようやくでたのは、救いようのない間抜けな慰めだった。

「泣いてなどおりません！」

はらはらと瞳から雫を落しつつ、年上の妻は幼子のような返事を返す。

俺は慌てた。

「ああ、落ち着け。これはなんだ？」

なんとかかいつもの声音で、彼女の濡れた頬を指先で拭う。

しかし、その指先が震えている。

落ち着くのは、俺の方だ。

妃の涙は、国の大事以上に俺を動揺させた。

「泣き止んでくれ」

情けなくも懇願するしかない。

とにかく、涙を止めてくれ。

でなければ。

「どうして良いか分からなくなる」

本当に。

ここで、もう国に帰ると言われようものなら、俺は壊れるぞ。

彼女は涙にけぶる瞳を大きく見開いて、俺を見つめた。

もはや、俺はどんな表情をしているのか分からない。

「……申し訳ありませんでした」

やがて、彼女は憑き物が落ちたように、力を抜いた。

同時に、俺の中に吹き荒れた動揺も、ピタリと止む。

お互いに、寝台の端に座り込む。

「いや……詫びはいらぬ。お前が何を思い悩んでいるのかは分かったが」

俺は頭をかいた。

「困ったな」

「申し訳……」

俺の言葉をどう受け取ったのか、もう一度口にしたその言葉を「俺には10年前のお前も、今のお前も……俺には何も変わっていないように思えるのだが」

そんな風に遮った。

「……確かに……俺もお前も時を経た」

山河の10年の些細さに比べて、人の10年はどれだけ大きいものか。

「俺は10年前の、お前より小さくて……お前に守られるばかりだった幼子ではない」

彼女はじつと俺を見つめた。

幼子の面影を探しているのだろうか。

だが、無理だろう。

俺の10年は、彼女のそれよりも、ずっと大きな変化をこの身にもたらしたのだから。

「……お前は10年前より……凛と美しくなった」

あの謁見室で、10年ぶりにお前を見た時。

記憶にある少女の面影を残しながら、大人の女性に変貌したお前を、俺がどれほどの驚きで受け止めたか。

そして。

「だが、変わっていない」

それにも、また驚かされた。

「俺が恋したお前の……優しさや強さは何も変わっていない」

俺は、確かに10年前のお前に恋をしたのだろう。

それを忘れられずに、ここに召し上げたのも、事実だ。

だが、今、こうして惹かれているのは。

離れていれば、お前に会いたいと思う。

会えば、触れたいと思う。

それは、今、目の前にいるお前だ。

俺は、間違いなくそうだと言える。

「……それが……幻想です」

彼女は、プイッと俺から顔を背けた。

しかしながら、その頬から耳は朱に染まり、俺の言葉が彼女に届いていることを表している。

「私、優しさも強さも美しさも……なんにも、陛下が思っ下さるようなものは持ち合わせておりません」

「そうか？」

拗ねたような口調が、なんとも愛らしくて、俺はつい笑ってしまった。

それが、お気に召さなかったのか、愛しい正妃殿はきっと俺を睨みつけた。

「そうです！ 早く気がついて、私など国にお返し下さいませ！」

聞きたくなかった筈の一言が彼女が飛び出る。

しかし、思ったよりも動揺していないのは、これが彼女の本音というよりは駄々をこねた拳句の売り言葉だと分かるからだ。

「……頑固なところは以前より増したな」

頑ななところがあるのは知っていたが。

「年を取ると頑固になるんです」

彼女はやけになったように、俺を睨んだまま答えた。

ここに到着したばかりの頃は、逸らされていてばかりだったそれ。ようやく慣れて俺を見ることができるようになったと思ったら、

最近、また逸らされがちだったセピアの瞳。

それが、俺をまっすぐに見据えていることに、睨まれているにも関わらず、俺の心は和やかだ。

「そんなお前も、嫌いではない」

彼女の頬が、更に染まる。

俺はその頬に手のひらを触れた。

「それに……そんな風に泣くお前を見るのも初めてだ」

自らの失態を思い出したのか、彼女はいたたまれないように俯いた。

「だが、そんなお前も悪くない」

そう。

年上然と構えていられるより、感情をぶつけてくれた方が良い。それを受け止められる程度の男ではあるつもりだ。

彼女は更に俯いた。

目に入る肌はどこも鮮やかな朱色だ。

「……お前の膝枕だな」

いきなりの話題の転換は、10年前との差を語る振りをした意趣返しだ。

俺を動揺させた、俺の想いを疑う、彼女への。

彼女は涙の渴きかけた瞳を瞬いた。

「10年前はただ寝心地がよかったが」

言いながら、俺に予想外の安眠をもたらした脚に手を触れる。

「……あの……陛下？」

俺の声や手にある不埒な気配に気が付いたのか、彼女が強張る。

「今も寝心地は最高だが」

薄い生地越しの体温を、手のひらで楽しみながら。

「同時にひどく悩まされる」

顔を寄せて、目の前で囁いた。

「……何をおっしゃっているのか分かりかねます」

なんとか落ち着いている状態で言う妃の声は、だが震えている。

俺から離れようと身を引くのを、許さぬと腰を抱いた。

そして。

「このあたりの柔らかさも……香りも……」

腰の一番円やかな場所から、一番細い所まで。

指先に微妙に力を入れながら、撫で上げていく。

「陛下！」

彼女の手が、俺の肩を押した。

そんな抵抗は無駄だと、さつきも思い知った筈だろう？

「10年前とはまるで違って……」

俺は、彼女を持ち上げるようにして抱き寄せ、向かい合わせに膝に乗せた。

「陛下！」

お互いに身につけているのは、薄い生地 of 寝着のみ。

俺の体温が一気に上昇したのを、お前は感じているだろうか。

「今のお前には……ひどく誘われる」

生地を押し上げる胸元に顔を埋めて、その香りを思い切り吸い込んだ。

「つも、いいです！」

悲鳴のようなそれを無視し、更に腰を引きつけて重ねた。

あたかも、情事の最中であるかのように。

意趣返しのもりだったのだがな。

「陛下！ お離し下さい！」

彼女の声が切羽詰まっていて、俺の当初の意図は既に成し遂げられていることに気が付きながら、なお手離せない。

既にこれは意趣返しなどではなく、俺の欲望の吐露だ。

「時折、お前の中に少女を見つけて懐かしいが……」

10年前のお前を垣間見た時の俺の感情は、懐かしいという感傷であることが、多分、一番相応しい。

そして、今のお前は。

「俺を煽るのは今のお前だ」

俺を改めて惹きつけ、焦がれさせる。

「……分かりました！」

いきなり、彼女が叫んだ。

勢いあるそれに、俺の暴走しかけていた欲望が留まることを余儀なくされる。

「何がだ？」

突然、何が分かったのだ。

「陛下が……今の私をきちんと見て下さっているということを」

「ほお？」

それは、いつか言った俺の本気を分かったということか。ならば。

「ですから、私も迷わずきちんと陛下を拝見致します」

ならば……と、先に進みかけた俺を留める一言。

俺は少々呆れた。

「お前……まだ、そこにいるのか」

俺は、俺の気持ちにもうすっかり気が付いて、ついでに身体もすっかりその気なのだが。

「……年を取ると出だしも歩みも遅れがちになりますの」

彼女は、しらっと答えた。

そういうところは、確かに年を経たそののなさが見える。

だが、お前がそういう態度ならば。

「俺は若いからな……そうそう抑えておれん」

俺は言って、彼女を寝台に押し付けた。

「……っ陛下！」

彼女は、怯えたように俺を見上げた。

そうだ。そうやって、怯えれば良い。

俺はお前の弟妹ではない。

いつでも、お前を欲しがっている飢えた男だ。

「だいたいが……こんなに俺を誘っておいて、よくもそんなに逸らせるものだな」

言いながら、俺は彼女の脚の間にある己の腰を更に押し付けるようにして重ね合わせる。

俺の欲望を、彼女に思い知らせるために。

「誘ってなど……っ陛下」

切羽詰まって震える声が、俺を留めようと必死に発せられる。

少しでも、俺を遠ざけようと伸びる腕の両手首を纏めて捉えると、シートに抑えつけた。

「陛下！」

声に泣きが混じった。

先ほどは俺に混乱をもたらした涙が、うつすらと浮かんでいる。

だが、今度は俺は、それらを受け止めて、なお、首筋に口付けた。

「香りが誘う」

耳元に囁けば、重ねた身体が大きく震える。

それにつられて、欲望に身震いしながら、俺は彼女の胸を手のひらで包み込んだ。

「……この身の柔らかさは……暖かさは、何だというのだ？」

彼女は、潤んだ瞳で俺を見つめた。

怯えの涙であることは分かっているのだが。

しかし、それでも、俺を煽る。

「俺に抱かれるのを待つばかりのようではないか」

俺は彼女の手首を離した。

彼女の手はもう俺を遠ざけようとはしなかった。

その代りと言うように、手のひらが俺の口元を覆う。

「……っもう、黙って下さい！」

彼女の手のひらに舌を這わせれば、慌てたようにそれが引かれる。解放された口元で、俺は最後の一言を囁いた。

「黙らせてみる」

そして、彼女に唇を寄せる。

唇が重なった瞬間、腕の中にさざ波が起きたが、それが大きな動きに変わることはなかった。

彼女との初めての深い接吻を堪能し、だが、そこで俺は必死に自らを制して彼女の上から傍らへと身を滑らせた。

このまま本懐を遂げてしまうことも可能に思えた。  
だが。

希望が見えた。

いずれ、彼女が自ら俺を求めるだろう、と。

だから、今は、欲望を宥めて鎮める。

濃密な接吻の余韻でくたりと力ない正妃をそつと抱き寄せれば、  
抗う風もなく柔らかな肢体を俺に預けてきた。

「今後は俺以外の者への膝枕も添い寝も禁ずる」

これは本気だ。

彼女は俺の腕を枕にしながら、不思議そうな顔をする。

「……弟妹にしかしたことございません」

それでも、だ。

「弟妹にも禁止だ……その辺りの猫やら犬にも禁止したいくらいだ」  
以前、迷い込んだ子猫を抱き上げていた様子を思い出し、俺は思  
わず言っていた。

自分でも呆れる独占欲だ。

彼女は俺の言葉にクスリと笑いを零した。

「……承知いたしました」

呆れてもいない、怒ってもいない、柔らかな微笑み。

憂いがないそれが……やはり、何よりだな。

まもなく、妃は俺の腕の中で眠りについた。

この様子では随分と思ひ悩み、ここところは安眠とも遠かった  
のだろう。

それは俺にとって決して悪い話ではない。

少なくとも、彼女は俺に無関心ではない証だ。

いいや。

無関心どころではない。

10年前の姿を探すと俺を責める。

10年前を求めていると涙した。

それが何を意味するか。

お前が気が付く前に、俺は気が付いた。

「……あと……どれぐらい、辛抱させられるのだろうな？」

仕返しのように寝顔を見て。

穏やかなそれを見守りたいような、揺さ振り起こして……。

何にしても。

そこに俺は10年前の姿を探していないことを確信していた。

## その6（後書き）

だから、いつまでRなしでいけるのよ？ と思う作者なりました。

## その7

私の夫である陛下が、この部屋を訪れてまずなさること。

それは、私を抱き寄せて頬に口づけすること……だったりする。

ただし、これは、ここ少しの間に出来上がった慣習。

いつたい、いつからこんな風になったのかしら。

なんて、言うのは白々しいばかりで、それははっきりと分かっている。

あれ以来。

年甲斐もなく、小さな子供のように感情を高ぶらせ、陛下をずるいと責めたあげくに、泣いてしまったあの時以来のこと。

でも、時期ははっきり分かっている、どうしてこうなったのかはよくわからない。

どうして、あの状況からこの状況に繋がるのかしら。

もっとも、それ以前にわからないのは、どうして泣いてしまったのか、ということだけだ。

陛下がことあるごとに10年前の私を探す……でも、それって当然。

求めているらしやるのは、あの頃の私……これ、当たり前。

そうして、現在ここにあるすっかり大人になった私と、あの頃の少女であった私の落差に、事あるごとにお気づきになり、いずれ、落胆ばかりになる。

ああ、時が経ったのだな、と思われるだろう。

この年増の女は、初恋の少女とは違うのだ、と。

いずれ遠くない未来にも、失望なさって私は国に帰されるだろう。それは、私がここに輿入れした時から思い描いていた未来で、私の望んでいたことの筈なのに。

なのに、涙が零れてしまった。

ふと、陛下が漏らされる10年前の私を見つけた時の言葉や、懐

かしいような笑みが苦しくて。

そのくせ、私には今の陛下を見るようにおっしゃるのが悔しくて陛下に言われて、初めて気がついた程に、知らぬうちに涙が溢れて止まらなかった。

あれはどうしてかしら。

本当にわからない。

一時の多忙な時期は過ぎたようで、陛下は一日か二日置き……場合によっては連日、私の部屋に現れる。

「お帰りなさいませ」

そして、執務を終えた後、正装も解かずにもつすぐにここを訪れたのであろう陛下を、私はこの言葉で迎える。

「ああ、ただいま」

答えながら、遅しい腕が私に伸びてくる。

慣れって怖い、と思う。

抱き寄せられて強張るばかりだったのは、何度目までだったかしら。

こうして、陛下の腕におとなしく納まって、頬へのキスを受けているなんて。

私的初対面……10年前の陛下を覚えていないもの……ではその視線の鋭さに慄き、初夜ではこの方の雄々しさに怯えたのが嘘のよう。

頬へのキスが髪へと移る中、私は陛下の堅苦しい正装を解くべく、目の前に並ぶボタンに指を伸ばす。

これも妙な慣習だわ。

本来なら、妃ではなく、たくさん控えている侍女の仕事。

だけど、いつだったか、長女の習性で、ついお世話をしてしまったのを始まりに、この部屋ではすっかり私の役目となってしまったらしい。

私が陛下の衣服を寛がせ始めたのが合図だったように、今日もこ

の仕事はなしだとばかりに、何人といった侍女が一礼して部屋を出ていく。

皆さん、お給金分は働いて下さい。できれば、この方を私から引きはがして、肅々とお仕事をこなして欲しいのですが。

と言いたいところだけど、私が拒めない陛下を、侍女達がどうにかできる筈がない。

この部屋に戻るなり私を抱きしめて、そのままなかなか離して下さらない方が満足するまで、ずっと侍女を待たせるのも悪いし、何より陛下に抱かれていた姿を見られるのがいや。

私と陛下が不釣り合いなことは、十分承知している。

今更、改めて知らしめることもないと思うの。

だから、結果として侍女には出て行ってもらって、私が陛下のお世話をするというところに落ち着く。

「陛下。おとなしくして下さらないと、ボタンが外せません」

頬から髪へのキスに留まらず、目元や額に触れてくる陛下の唇のくすぐったさに身を竦めながら、私は非難を口にした。

本当に、慣れって怖いわ。

こんな状況にパニックにもならず、私は淡々と陛下の正装を脱がし終え、唯一部屋に残っていた侍女頭にそれを手渡した。

「何か召し上がれますか？」

そろそろ、離して欲しいと思って、そっと胸元を押しやりながら尋ねる。

「そうだな」

私の小さな抗議は広い胸にあっさりと却下される。

仕方ない。

陛下が満足するまでここで大人しくしていよう。

慣れるのと共に、諦めるのもすっかり早くなったわ。

「では、何かお持ちしましょう」

「軽いもので良い」

陛下の返事を聞いた侍女頭がそれを準備するために、部屋を出て

行ってしまうって二人きりになる。

まだ、離してくれないのかしら。

なんだか、いつもより長め？

「陛下、そろそろ離して下さいま……」

見上げて抗議を口にしようとする、陛下の顔が近づいてきて、唇に口づけられた。

軽く触れて、離れていく。

「……もう一度、良いか？」

なぜ、一度目は何も言わずになさるのに、二度目はお尋ねになるのかしら。

しかも、返事をする前にもう一度口づけられる。

これも軽く触れるだけ。

深いキスは、あの時の一度だけ。

それ以来、こうして戯れられることばかりで、一向に何かなさる様子はない。

別にして欲しい訳ではないのよ？

なんて言うか。

その気配も全くない、から。

これは、結局のところ、やっぱり私は陛下が思っているらしいやつたのとは違っていて。

本当は、もうすっかりなさる気がないのではという気がしてきて。

それにね。

落ち着いて考えてみれば、この方の望まれることって、弟妹と同じなんですもの。

膝枕でしょ。

あと、添い寝。

着替えのお手伝いに、それから、いつかは果物も食べさせて差し上げたわね。

いずれ、お伽話も所望されたりして。

そう思えば、この口づけだって、少しばかり場所が違っただけで、弟妹とするものと変わらない。

今の私のことを好きとおっしゃって下さったけれど。

その想いは、本当なのかもしれないけれど。

でも、陛下は少し勘違いをいらっしゃるのかも。

本当の陛下のお心は、私に恋をしたという8歳の頃が懐かしくて、その頃と、同じことがしたいだけなのではないかしら。

そうなら、それで良いの。

そうして差し上げることは、別に嫌ではないもの。

ただね、私に求めているのはそうだと、きちんと教えて欲しい。そういうことで良いのかしら、と探っている感じが少々もどかしくて。

私を抱き寄せながら、その先に進まないのは何故かしら……なんて、思い悩むのが……この感じは。

面倒？

そう、面倒なの。

それ以外に、理由はない。

陛下の口づけは、またも目元や頬に。

本当に、そろそろ離して欲しい。

なんだか……何故か分からないけど、また、泣きたい気分になってきたから。

「何をなさるの……！」

なかなか、離して下さらない陛下からどうやって逃げようかと考えていた私の耳に、突如、女性の激しい声が届いた。

「何の騒ぎですか？」

ちょうど、陛下への軽食を持って、戻ってきた侍女頭が答えてく

れる。

「……また、あのお二人ですわね」

「また？」

私は、これをきっかけに、陛下の腕からすり抜けた。

「おい」

不満げな声を聞こえぬ振りでやり過ごし、テラスへと出る。

少し離れたところで、二人の女性が言い争っているのが見えた。

大声でのやり取りは、早口で捲し立てあっているため、何を言っているのかまでは聞き取れない。

だが、段々エスカレートしていく様子は、はつきりと見て取れる。  
パシン！

というのは聞こえなかったけれど、小気味良い音が響いたと想像がつく動作が目に入る。

あ、あれは痛い。

頬をはたかれた女性は仕返しとばかりに、相手の髪を掴んだ。

このまま放っておけば、取っ組み合いになりそうな勢いだ。

見兼ねて、私はテラスから降りて、そちらへと近づいた。

二人の顔がはつきり分かるほどに近付いた頃には、騒ぎを聞きつけた後宮の女性達や、止めるべきかを迷いつつ面白がっているような衛兵達を取り囲んでいた。

私は、それをかき分けて、中央へと近付いて行く。

「いい加減に……」

喧嘩を止めようと声をかけかけて、気が付く。

ああ、そうね。

ヒステリーを起こしている方々には、こんな声じゃ聞こえないわよね。

私は思い切り息を吸い込んだ。

そして。

「いい加減になさいませ！」

お腹の底から、声を上げた。

ざわめいていた周りが、シンと静まる。

そんなの予想の範疇だから気にせず、はっとしたようにこちらを向いた二人に言い聞かせるように声を張る。

「何をみつともなく争っているのですか！」

取っ組み合い、引っかき合い、引っ張り合い。

結果としてぼろぼろとなった二人の美女は、啞然といった風で私を見た。

まあ、驚くでしょうね。

今までの……この後宮で大人しくしていた私の様子が、私本来だと思っていたなら。

でも、私は、多くの弟妹を抱える長女だ。

こんな喧嘩の仲裁は、自慢ではないけど、しなれているの。

「一体、何が原因なのですか？」

大人しくなつて、へたり込んでいる二人に、私は尋ねる。

こんな騒ぎになるほどの大事を放っておくわけにはいかない。

例え、形ばかりの正妃であろうとも、私はこの後宮において最高位にあり、ここの秩序を保つのは私の役目だ。

「……どこか修道院にでも行つてしまいたいと言いましたの」

答えたのは、確か隣国からお輿入れされた方だと聞いている。

美女というよりは美少女と言った風情の小柄な方で、赤い頬が痛々しいばかりだ。

「……どなたか、冷やした布をお持ち下さいな」

私は見物人となり果てている方々に向かって言ってから、「それで？」と先を促した。

「そうしたら、頬を叩かれて……」

「私、少し前までは、この方と陛下の寵を競っておりまして！」  
遮るように言うのは、喧嘩のお相手だ。

こちらの方は、華やかな顔立ちと豊満な肢体をお持ちのいかにも美女らしい美女。

確か、この国の貴族のお一人の御令嬢。

このお二人が陛下の寵妃な訳ね。  
陛下って……好みが分からないわ。

「新たな寵妃が現れたからと言って、オメオメと引き下がるなど、情けないではありませんか！」

新たな寵妃……って私ですか？

私でしょうね。

このお二人に比べると随分と見劣りしますけど。

「ですが」

美少女が唇を噛み締める。

「私、貴女に負けまいと頑張って参りましたのに！」

美女が熱く語る。

ああ、この二人って。

よくこうやって言い争っているのだろう。

今日はそれがエスカレートして、こういう事態になってしまったけれど。

「でも、陛下の正妃様へのご寵愛ぶりを見れば、もうこれ以上は！」

「まだ、そんな弱音を！」

美女の手が、美少女に伸びかける。

「おやめなさい！」

私はまたも声を張った。

振り上げられた美しい手がピタリと止まり、二人揃って私を見る。

「要するに貴女方は仲が良いのね」

そう、この二人、仲が良いのだ。

お互いにお互いを認めているから、言いたいことを言い合える。

だって、美女の前で、弱音を吐いたのでしょうか？

だから、美少女が弱音を吐くことが、腹立たしいのでしょうか？

「は？」

思いがけないことを言われたとばかりに二人はポカンと私を見上げた。

その様が、全く似ていない筈の二人を、姉妹のようにも見せて私

はつい笑みを零した。

だが、その笑みを消して、ピシリと言う。

「言いたいことを言い合い、お互いに磨き合うのは結構。ですが、一々騒ぎ立てられては迷惑です」

こういうことは、きちんと言っておかないと。

後宮は多くの女性が陛下お一人のためにお仕えする場所。

争いが絶えないことは仕方がないこと。

でも、それでも、陛下がお寛ぎになる場所であって欲しいし、心安らかでお過ごしになる場所であればいいじゃないと思うの。

「以後、お慎み下さい」

お二人は、慌てた様子で身を正し

「はい！」

揃っての行儀良い返事に満足して、私は振り返った。

その場には……目を丸くしたり点にしたりする、後宮に住まったり、後宮を守ったりしている面々が居並んでいた。

あら。

もしかして、余計なことをしてしまったかしら。

隅っこで、小国の姫君然と大人しくしていれば良かったかもしれない。

でも、放っておくことができなかったのだもの。

気まずい空気が流れる中に、押し殺したような笑いが聞こえてきた。

そちらを見遣れば、人だかりの後ろでその人が笑っていた。

「陛下！」

私は、堪え切れないように声を上げて笑い始めた美丈夫へと近づいた。

「何を笑っていらっしゃるの？」

何故か、少し腹立たい。

うつん、少し、ではないかも。

どうして、こんなに苛立たしいのかしら。

「うん、相変わらず見事だな、と思って……お前を正妃に迎えて正解だったな」

カチンときた。

私は、後宮の平穩を守るために正妃になったの？

ならば、言わせて頂こうではないか。

「そもそもは」

私は、陛下に詰め寄った。

「陛下がこちらの方々を蔑ろになさったことが原因ではありませんか」

私が召し上げられる前は、通っていたのであろう方々。

私が正妃となってからは、多分、通っていらっやらないのだらう。

でも、彼女達は実際に陛下の寵を受けていた方々。

私は寵妃と言われたけれど、本当の私は、あの方々より、陛下から遠い所にいる。

「それは……しょうがないな。俺はお前を手に入れたから」

手に入れる気など、本当はないのでしょうか？

初恋の思い出に少々浸ってみたいだけ。

ついでに、年を経ている分、道理をわきまえていて、後宮を仕切る都合の良い正妃？

「戯れ事は結構です」

私は陛下から身を引いた。

背を向けて、部屋に向かう。

「おい」

後を付いて来ようとなさるのを、振り返って視線で止める。

「しばらく、私の部屋への出入りはお断り申し上げます！」

勢いで言い放てば、陛下は珍しくもあからさまに慌てた様子を見せた。

けれども、私の苛立ちは、納まる気配がない。

ああ、もう嫌！

「おい？」

「反省なさいませ！」

伸びてくる腕を避け、背を向けて歩き出す。

背中に陛下の気配と

「ちよつと待て！」

という声。

本当に、ついてこないで。

自分でも持て余すこの感情の高ぶりでは、どんなことを陛下に言  
つてしまうか。

「今夜は他でお休み下さい！」

振り向きもせずになんか言っ、私はシンと静まりかえっている人  
ばかりを後にした。

部屋に入り、そのままベッドに倒れ込む。

これは、何？

なんで、こんなに腹立たしいの？

どうして、こんなに。

哀しくて。

切なくて。

もう訳が分からない。

「陛下の馬鹿！」

修道院に行きたいのは、私の方だ。

不敬罪で、国外退去でもいい。

とにかく私は、少しでも陛下から離れたいと願っていた。

## その7（後書き）

お妃さま、キレる！ の巻でした。

どうする、陛下！

ここで、終われる筈がないので、第8弾を近々必ず！

## その8

「これで、治まりもつきましよう。どうぞ、今夜は後宮にお渡りになりごゆつくりなさいませ」

俺のしたためた書状を恭しく受け取ったタヌキ親爺……いや、父王の代から忠実に仕えている、俺が最も信頼する宰相が言う。

もちろん、俺が後宮に渡れぬ事情があるのは、承知の上だろう。幼い頃から知られている気安さで、思わず露骨な眉を寄せて見遣れば、常に浮かぶ温和な笑みは、僅かに歪むこともなくそこにあつた。

「そうなさいませ」

簡単に言ってくれるではないか。

毎日のように通っていた正妃の部屋が、今の俺にとってどれだけ遠いか。

後宮史上初の。

前代未聞の。

正妃から皇帝への『出入禁止』令。

多くの人々の前で高らかに言い渡されたそれ。

何を言っているのだと笑い飛ばすには、正妃の怒りようはあまりにも衝撃的で。

追いかけて詫びようにも、正妃が諭すように他の妃の元を訪れる気がない以上、どんな言い訳もできよう筈がない。

更には、あの騒ぎの直後に腹立たしくも「西方の部族に反乱の兆しあり」との報告を受け、執務室で宰相と顔を突き合わせて過ごす羽目になること一週間。

密偵を駆使し、公使を遣い。

表から裏から、あらゆる策を講じて、なんとか血を見ることなく、危険分子の排除には成功はしたものの。

賢帝と呼ばれている筈の俺は、妃の懷柔策の一つとして思い浮かぶことなく、こうして執務室に留まっている。

会いたい。

あれ以来、ちらりと姿を見ることさえできていない。

問題が解決した今、飛んで行って抱きしめたい。

俺の中は、そればかりだ。

だが、拒否されたら？

正直、どうなるか分からない。

この一週間、会いたくて、触れたくて堪らなかった。

ほんの少しまで、垣間見ることさえできない遠い存在だったのに。

俺は未だかつてなく、彼女に餓えている。

彼女に拒否されたら……きっとこの餓えは暴走する。

どんな理性も、太刀打ちできない。

彼女がどんなに抗おうと、嫌がろうと、俺は欲を満たすだろう。

宰相が出て行った部屋で、少しの間思案していた俺は、意を決して椅子から立ち上がった。

こんなところでグズグズしていても仕方がない。

暴走した時は、暴走した時だ。

第一、それは悪いことか？

彼女は俺の妃だ。

俺には彼女を手にする権利があり、彼女はそれに従う義務がある。これは、俺がもっとも否定したかった力関係に違いない。

だが、それを振りかざさねば、彼女の元を訪れることができぬほど。

そんなことで納得しなくてはならぬほど。

俺は追いつめられていた。

後宮への道を忙しく歩み、その勢いのまま目的の部屋に踏み込む。もちろん、彼女はそこにいた。

「……陛下」

一瞬にして、暴走するどころか、完全に毒気を抜かれた。

彼女は俺を見た途端に、ほっとしたような表情を浮かべたのだ。

「お帰りなさいませ」

しかも、いつもの言葉を口にし、歩み寄ってくる。

言葉を返すことも忘れ、俺は目の前に立つ、一週間ぶりの寵妃に見入る。

俺の胸ほどまでしかない小さな身は相変わらずだが、色付く頬や、寝着から覗く喉元が、幾分痩せたように見えるのは、俺の希望的な思い込みだろうか。

ただただ呆けたように見下ろすだけの俺を、彼女は笑みこそないものの穏やかな表情でじっと見つめていた。

しかし、やがてそれが陰しいものに変わっていく。

やはり。

「まだ、怒っているのか？」

怒りは解けていないのか。

何かの間違いで迎え入れてはくれたものの、俺の顔を見た途端に怒りが再燃したのだろうか？

次に聞こえてくるのは、この部屋から出ていけという一言だろうか。

ここに来るまでいきり立っていた俺の心は、彼女の表情一つにすっかり大人しくなっている。

彼女が言えば、それに従うだろう。

「怒って？」

彼女は寄せた眉を解かぬままに、だが、その表情を隠すように俯いた。

「……怒っておりますとも」

小さな呟きが聞こえた。

出ていけ、ではない。

そして、俺の手に彼女の手が触れる。

たかがそれだけのことなのに、滅多に彼女から触れてくることなどないから俺の心臓はいきなり跳ねる。

「おい？」

彼女は俺の手をギュツと握って、歩き出した。

小さな子供のように手を引かれて、連れて行かれたのは寝台だった。

彼女は手を離すと、今度はその細い指先で俺の上衣の紐を解き、ボタンを外していく。

最近はずっかり慣れ親しんだような行為だが、それでも彼女がそうする度に俺の心はざわめく。

ついつい抑え切れずに、口づけてしまうのが常だが、さすがに今はそれは憚られた。

テキパキとした手つきはいつものこと。

しかし、表情は緩むことなく、極めて険しいままだ。

彼女はボタンを外し終わると、迷いなくそれを脱がした。

誰もいない部屋で、上半身をむき出しにした俺と、薄手の寝着を身につけた彼女が向き合っている。

どうしても、この女が誰より愛しい。

他の誰もいない。

この女性だけが。

思い知らされる想いに、抑えきれずに腕を彼女に向かって伸ばせば、それはスルリとかわされる。

触れさせては、抱きしめさせては、もらえぬのか。

やはり、訪れるべきではなかったのかと途方に暮れる俺を置いて、

彼女はさっさと寝台に上がった。

「陛下」

そして、俺を呼ぶ。

「……こちらへおいで下さいまし」

こちら、とは寝台に上がって良いということか？

彼女はシーツの上に座り込み、俯いている。

表情は見えないが……肢体の線も露わな絹一枚を身にまとい、寝台の上で待つというその姿に、抜かれた筈の欲がむずむずと蠢き始めた。

一体、この状況はなんだ？

誘われている？

まさか。

だが。

焦がれた女がベッドに招く事態に、頭がボーとして、身体が熱くなる。

俺はどこかおぼつかないように寝台に上がり、彼女に近付いた。

今度こそ、抱きしめられるだろうか。

「お休みなさいませ」

だが、正妃はきっぱりとそう言った。

いつも俺がするように、シーツをポンポンと叩く。

俺は赤子のような四つん這いの格好のまま、上下してシーツに皺を描く彼女の手を眺めた。

「寝て下さい！」

焦れたように勢いよく言われ、思わず、おとなしく横になる。

「いったい何日、寝ていらっやらないのですか！？」

彼女は俺の身体に柔らかな上掛を被せた。

その口調は、出入禁止を言い渡した時よりも一層厳しく、だが、怒りだけではない感情が滲み出ていて。

だから、ついつい言ってしまう。

弱気な恨み言に近い真実。

「お前が出入禁止を言い渡してからだな」

西国との交渉故に、眠らなかったのか。

もちろん、それもある。

ひっきりなしに入る密偵からの報告。

公使は、面では西国の王と、裏では様々な権力者との交渉に臨んでいた。

俺は漫然とそれを玉座で眺めていた訳ではない。

だが、それでも、我が国の精鋭たちは、俺に幾らかの休眠を取らせることができぬ程に無能ではない筈だ。

俺は眠れなかったのだ。

彼女はまず目を見張り、次に眉を寄せ、そして、最後は唇を噛んで俯いた。

言わなければ良かった。

だが、どうしてだろう。

彼女の前に出ると様々な感情が制御できなくなる俺だが、今日はいつもに増してそれが顕著だ。

「お休みなさいませ」

彼女は俺の傍らに座り、俺を見下ろしている。

その表情からは、怒りはすっかり抜け落ちて、ただただ心配げなばかり。

久しぶりだから。

もっと、明るい表情も、見たいのに。

だが、その表情をさせたのは俺だな。

「膝枕でも、添い寝でも……お伽話でも、何でもお望みの通りに致しますから、眠って下さい」

お伽話……なんだ、それは。

俺はお前のやたらたくさんいる弟妹ではないぞ。

この場合、俺が望むならば、お伽話ではなくて、伽そのものだろう。

しかし、彼女が自ら寝台に上がる程。

自ら何でもすると言っ程。

「そんなに疲れてみえるか」

彼女はただでさえ険しい表情を、更に厳しくする。

「ご自覚がないのですか？」

彼女は俺の傍らに横になった。

見下ろす視線が、同じ高さ変わる。

「……皆様、私に陛下をお許しするように進言くださいました」

だから、か？

だから、お前はこうして俺を受け入れるのか。

誰かに、言われたから。

「余計なことを」

思わず言ってしまう。

様々な感情が渦巻く。

怒りやら。

哀しみやら。

どういつ訳か、息苦しくて、あちらこちらが痛くて、俺は横たえた身体を少し丸めた。

「皆、陛下がご心配なのです」

彼女は俺をたしなめる。

年上のそれ、だ。

また、弟扱いだな。

だが、今の俺では仕方ないか。

「陛下がお倒れにでもなったら、この国はどうなりますか」

どうなるだろう。

少なくとも、先ほど解決した筈の反乱分子はすぐにも復活するだろう。

大人しく見えている近隣諸国も、我が国に取って代わろうと反旗

を翻すかもしれない。

国は荒れて、民は辛い思いをするだろうか。

だが、今はそんなことは、どうでも良かった。

「……お前は？」

お前は俺に出入禁止を言い渡した後、どうしていた？

お前のところに現れないのは、他の妃の元に通っている訳ではなく、執務室にこもっているからだということは、多分侍女頭辺りから聞いていただろう。

「お前も俺の心配をしたか？」

本当はそう聞きたい訳ではない。

本当は。

少しは寂しかっただろうか。

俺に会いたいと思っただか？

俺の体温を思い出すことはあっただろうか。

「当たり前です」

それは。

「俺が倒れたら、国が混乱するからか？」

一体、俺は何を言っているのだ？

「陛下！」

妃は身を起こした。

また、怒らせたらしい。

俺は、顔を半分シートに埋めるようにしながら、それでも、見下ろしてくる彼女に視線を向けた。

俺をじつと見つめるセピア。

怒っているかと思いきや、そんな風はまったくなく、何かを探すように、確認するかのように俺を見つめる。

「……陛下？」

妃の手が、俺の額に触れた。

ひやりと冷たい手。

人の手とは、こんなに冷たいものだったか？

「熱がおありです」  
なるほどな。

俺の体温が高いのか。

発熱なんぞ、何年ぶりだ？

小さな頃はひ弱で、よく熱を出したものだ。

そのたびに、まだ生きていた母が、泣きそうな顔で夜通し看病していた。

「陛下？」

彼女は、また眉を寄せた。

だが、今度のそれは完全に怒りでなく心配。

母と同じように、泣きそうな顔で俺を見ている。

「……大丈夫だ」

言えば、手のひらが額から頬に移る。

その心地良さに俺は目を伏せた。

どうやら、本当に熱があるようだ。

「医師を呼びます」

冷たい手が離れようとする。

「いらん」

俺はその手を捉えた。

半身を起こし、彼女の腰を抱いて縋る。

拒否らしい動きなどないのに、離さぬと腕に力が籠る。

「お前のせいだ」

ダダをこねる小さな子供。

分かっている、己の行動が止められない。

彼女の腹部に顔を埋める。

「お前が俺を拒むからだ」

言ってしまったから。

そうではない、と思いつつ。

何がそうではないのか、分からない。

「なんだ、俺は」

訳が分からない。

こんな風な俺を、俺は知らない。

「何を言っているんだ？」

完全に混乱している。

まずい。

これでは、本当に弟妹並みだ。

いたたまれず彼女から離れようと頭を上げた。

「陛下」

彼女の腕が、その俺の頭を抱えるように周り、胸元に抱き寄せる。

「お疲れなのです……私などで良いならば、いくらでもお側におりますから」

先程のお伽話といい、完全に子供扱いだ。

しかも、俺の行動は、そう扱われても仕方がない程に、大人げない。

だが、俺は子供ではないから。

柔らかな胸に頬を押し付けられ、宥めるように指が髪を梳き、手のひらが肩や背を撫でる。

そんな彼女の慈悲深い仕草にも、燦り続けていた欲望は煽られるばかりだ。

どんなに母のような貌をしようと、これは母親ではない。

俺が欲しい女だ。

俺は抑えきれずに、目の前にある彼女の胸元に口づけた。

布越しとはいえ、香りと柔らかさに瞑目する。

一気に身体が高ぶる。

俺の身体は、勝手に動き、彼女を寝台に押し付けた。

「陛下!？」

彼女は驚いたように目を見開き、だが、伸し掛かり喉元に喰らいつく俺を押しつけようとする動きはない。

むしろ、信じられないことに、彼女は俺の首へと腕を回し、抱きしめてきたのだ。

そんなことをされて、疲れに麻痺した、熱に浮かされた理性が崩壊しない筈がない。

俺は彼女の寝着の腰ひもを解いた。

「陛下」

彼女の腕に力が入る。

俺に身を寄せるようにして、俺が身を寄せるようにして。身体が重なる。

俺の手は、組み敷いた彼女の肌を探り、唇で彼女の首筋の線を辿る。

「お願い……です」

彼女は俺の一切を咎めない。

俺を抱く妃の腕は、そのまま。

拒む動きに変わることはない。

「……私などで良いなら……お望みのままに」

私など……ではない。

お前が欲しい。

俺は、お前だけが欲しい。

「ですから、休んで下さい」

今なら、彼女を抱けるだろう。

彼女は決して拒まない。

だが、これは彼女の本意か？

正妃としての義務感に、俺を休ませねばという使命感？

弱った男に対する同情？ もしく憐憫？

誰かしらの進言もあっただろうか。

俺に対する想いはそこにあるか？

熱に浮かれて尋ねれば良いものを。

熱に弱って、口にできなかった。

結局、俺は欲を抑えた。

この時、彼女の心中にある想いを知っていれば、俺は決して欲望を抑えたりはしなかった。

極度に疲労した身体が、種の保存本能とやらで猛るがままか。

募った想いが熱に浮かされるままか。

何にしても、彼女を貪りつくしただろう。

「……分かった。休む」

こんなところだけ熱があらうと、強固な俺の意志は、彼女の上から身を退かさせた。

何も言わず、身体を起こし、俺の乱した寝着を整える彼女は俺から顔を背けて、その表情は見えなかった。

「……お休みなさいませ」

小さな声が掛けられるのに、頷いて。

俺は、愚かにも眠りに着いたのだ。

彼女の膝枕で。

彼女の手を握って。

それにどれだけ彼女が傷ついているかも知らず。

## その8（後書き）

思わず、キーワードに「へたれ」といれてしまいました。  
それは陛下のことなのか、作者のことなのか……。

## その9

あの状況で、何もないって、もう決定的ではない？

私、拒まなかったわよね？

陛下の広い背に腕を回して、縋るように身を寄せて。

あの時のあれ、無意識だったの。

気がついたら、そうしていて。

離して欲しい、なんて一瞬だっと思わなかったのに。

でも、陛下は何もなさらなかった。

私を離して、私の手を握り、私の膝枕でお休みになった。

熱があつたから？

お疲れだったから？

そんな理由を無理やり作り上げるのも、馬鹿みただから止めた。  
やはり、陛下は……そう思った方がよほどしっくりくるのだから。

今日もとても良いお天気だ。

私の故郷は寒暖の差が緩やかで、とても過ごし易い土地だ。

冬はそれなりに冷えることもあるけれど雪が降ることなど決して  
ないし、夏は冬に比べれば暑くもなるけれど汗だくになるほどでは  
ない。

ここに来る前に学んだことや、侍女頭の話によると、この国の気  
候は私の故郷とはまったくちがって、季節ごとの落差がかなり激し  
いようだ。

私がここに到着したのは、もっとも寒い時期が過ぎ去って、暑い  
季節へと移行しつつある比較的過ごしやすい気候の頃だった。

この後、一気に暑くなり、やがて、また、寒くなるらしい。

暑さもかなりのものだが、寒さも相当のものらしく、雪が降り積  
もることも珍しくないのだとか。

私は雪というものを一度も見たことがないから、少し楽しみにしている。

でも、ここでの雪も見ることなく、故郷に戻ることになるかもね。

あ、自虐？ 違う、希望。

そう、これは希望！

の筈……なんだけど。

「随分と色つぽいため息をお付きになりますね」

誰もいないと気を抜いていたところに、いきなり、バルコニーの方から声をかけられる。

慌てて振り返ると、そこには、一人の女性……だと、思われる方が立っていた。

「ご無沙汰しております」

優雅に片膝をついて、胸元に手を当てて、その人は騎士の礼をくれる。

どこかで見たような。

って、印象的なその姿は、そうそう忘れられる筈がない。

面を上げて、にこりと微笑む美貌は、幾分大人びたものの、一瞬にして記憶に甦った面影を幾らも残す。

結いあげればさぞや映えるだろう鮮やかな金髪は、あの頃と同じく肩のあたりではつきりと切り落とされており、身につけているのは装飾の一切ない法衣のようなドレスと甲冑。

「……あ」

私は立ち上がって、無礼にも彼女を指さした。

「ああ！」

忘れる筈がない、女性ながらのその騎士然とした物腰。

姫騎士様、とあの時は呼ばれていた。

あれは何年前だろう。

この方は、我が国に療養に訪れていた方の護衛の一人だった方だ。まだ、少女らしさを残した方が、細い腰に重々しげな剣を下げて、

闊歩する姿は凜々しいながらも、どこか痛々しくって。

同じ年ぐらいいに見える女性の、私とはまったく違う生き方に、衝撃を覚えたものだ。

記憶にある当時のこの方は、多分15、6歳。

ということは、私もそれぐらいの年齢だったのだろう。

あら、15、6歳？

つまり、10年くらい前。

「え、と、貴女がここにいらっしやるということは……」

あの時、療養に訪れていたのはどなただったかしら。

この美しい姫騎士様が、大事に護っていらっしやった方。

それは。

「……陛下？」

そうに違いないだろう。

「……あ……」

私の頭の奥底に沈んでいた当時が、怒涛のように押し寄せてくる。

氣候の良い我が国は、年中療養だの休養だのと、各国の様々な方々が訪れる。

その中には国賓扱いの方も、もちろんたくさんいらっしやって。

この姫騎士様を含む一団も、そのうちの一つだった。

父王は詳しくは教えてくれなかったけれど、一団が護衛しているのは、身分のある方のご嫡子だと言っていた覚えがある。

「陛下は」

この姫騎士様が護衛なさっていたのは、どんな方だった？

凜とした男装に近い姿をした少女の傍らにいたのは。

「弟達が苛めていたあの小さな子？」

覚えている。

違う、思い出した。

「あの子？」

姫騎士様の背後に隠れるようにして、我が城を訪れた男の子。

私の弟のどの子より小さくて。

どの子より弱々しかった。

「……………それ、面影、なさすぎませんか？」

姫騎士様に言うでもなく、呟く。

だって、今の陛下の髪は濃い茶色、瞳は深い藍色だ。

私の思い出した子供は、この姫騎士様のような金髪で、瞳ももつと色素の薄い、言ってみれば浅瀬の水面のような青だった。

「髪や瞳の色が変わるのは、私どもの民族にはよくありますの」

いつの間にか、私の背後に控えていた侍女頭が、私の思考を読み取ったように教えてくれる。

年をとれば、白髪になる人も少なくはないのだから、そんなこともあるかもしれない。

それは、良しとしよう。

「それにしても……………」

あの小さな小さな子よね？

身体が大きくなったのは、年月を経れば当たり前。

まして、陛下の8歳と18歳は差は、私の15歳と25歳とは比べ物になる筈もない。

でもね。

弟妹を思い出すに、皆、それなりに昔の面影があるものよ。

でも、よ？

陛下には、一切ない。

あの頃の弱々しさとか、それ故の愛らしさとか。

言っではなんだが、微塵もない。

雄々しく、悠然した今のお姿の中に、それらは全くない。

思い出した今をもって、あの時の幼子と陛下が同一人物だなんて信じられない。

努力で、ああも変われるものならば、私だってもうちよつとなんとか頑張ったわ。

「なんて言うか……………ご立派になりましたね」

いろいろと思いは巡ったけれど、一言で言えばそうなるのかしら。

「陛下の努力の賜物です」

侍女頭が言う。

さようですか。

でも、あんなにお変わりになられては。

「……思い出せる筈がないわ」

つつい、漏らして私は椅子に座り込んだ。

「陛下があ那时的御子とはお気づきではなかったのですね」

姫騎士様がおっしゃる。

私は、彼女を手招いて、向かい側の椅子に座るよう勧めた。

彼女は深く一礼をしてから、従って腰掛けてくれる。

「気づかなかったわ……陛下は陛下で教えて下さらないし」

あの子。

父は敢えて言わなかったのだろうが、この大帝国の皇太子とは思  
いもしなかった。

年齢が近いから、と弟達に混じって遊んではいかがかと招かれた  
方だ。

国賓の中にお子様方がいらっしゃれば、そんな風に城に招くこと  
は少なくなかったから、弟達も慣れっこで最初は仲良く遊んでいた。  
でも、うちの大所帯に慣れた弟達の粗雑さに、大事に育てられた  
ひ弱な幼子についてはいけなかったのだ。

気がつけば、弟達は幼子を時に家来の如く暴虐に扱い、時に置い  
てきばりを喰らわせた。

それが、氣に入らずに助けたのだ。

弟達の頭を一つ一つと小突き「弱い者いじめはいけません」なん  
て、諭して。

そうしたら、幼子は弟達ではなく、私と一緒にいたがるようにな  
った。

自慢ではないけれど、小さい子には受けが良かったのよね、あの  
頃から。

スカートの裾を掴んで、側にいて欲しいとせがまれて。

幼く愛らしいばかりの子にそんな風に請われるのは、正直悪い気はなくて。

望まれるままに、ご本を読んで差し上げたり。

そう、昼寝の添い寝も、膝枕もして差し上げた。

「あの頃、陛下はお母様を亡くされたばかりで……」

侍女頭がお茶の準備をしながら、教えてくれる。

それも、知っている。

添い寝をしていた時、すり寄って来て母君を呼んでいたもの。

母性が疼いて、ぎゅっと抱きしめたことを覚えている。

「体調も思わしくなくて……それが貴女様に出会ってから、それはお元気におなりで」

当時を思い出すかのように、侍女頭の手が止まる。

「私も……貴女様がいらっやって良かったとほっとしたことを覚えております」

姫騎士様も、当時を思い出してか、微笑んでそうおっしゃった。

そうね。私だって、今なら、はっきり思い出せる。

私と何日か一緒にいるうちに小さな子に笑顔が戻り、弟達に混じって遊ぶ姿を見ることができるようになったんだもの。

私もそれを微笑ましく見守っていた訳で。

でも、それって。

「思うのですが」

その関係は、ですね。

「それは初恋というよりも」

あの幼子の私への想い。

私に求めるもの。

「はい？」

二人が私を覗きこんでくる。

「……単に母親代わりではないですか？」

失われた母の温もりが欲しかっただけでしょ。

そこに、たまたまいたのが私。

母親というほど年は経てませんでしたけど。

姉なら、ピタリとはまるわね。

いずれにしてもそれは、恋、なんてものではないでしょう。

「お妃様、男性は少なからず女性に母君の面影を求めるものですわ」  
なんて、したり顔で年長者は言うけれど。

そうは言っても、ね。

私が今陛下にして差し上げていることは、あの頃と何か違う？

陛下は大きな身体で、私を抱きしめる。

でも、それは小さな子が、スカートの裾を握るのと変わらない。

私の頬にごつごつとした手のひらを触れて、キスをするけれど。

あの頃の、お休みなさいのキスと、それは同じ。

そうでしょう？

「……まあ、良いですけど」

なんだか、納得だわ。

すっきりした。

ついで、気も楽になった。

母親代わりの延長なら、10年前も今も求められるものに、さして違いはない。

「お妃様？」

侍女頭が心なしか、青ざめて私を呼ぶ。

姫騎士様は、首を傾げて、私を見つめている。

私はそんな二人の前、妙に落ち着いた心持ちで、深く椅子に腰かけ、紅茶を口にした。

「母親でも姉でも構いません」

そうよね。

それなら、それで良い。

「あの、ですね」

侍女頭が何かを言いかけるのは無視。

私の行方は決まった。

この先、陛下が母だか姉だかの存在をお求めならば、その間はこの間にいければ良いし。

不要になれば、国に帰って、修道院にでも行けば良い。

だから、結局のところ、過去を思い出したところで、何も変化はなく。

「とりあえず、現状維持」

心で呟いたつもりが、ついつい口に出してしまった。

「お妃様！」

侍女頭が真っ蒼になって、私に詰め寄る。

「まさかと思っておりましたが、そうかもとおもっておりましたが

……陛下とお妃様はまだ！？」

ええ、まだですとも。

いえ、もう、この先もないです。

「陛下は一体何をしてらっしゃるんですか！？」

だから、何もしてらっしゃらないんですって。

今ここにはいらっしやない方に問いかける侍女頭をしり目に、私は冷めてしまった紅茶を飲みほした。

「……なるほど」

私の向かい側で、黙って事の成り行きを見ていた姫騎士様が、複雑な表情を浮かべている。

微笑み。

でも、困ったように。

苦いものを含むように。

そして、大きなため息。

「陛下が苦勞なさる訳ですね」

どうして、陛下が苦勞なさるの？

思いはしたけれど聞くのも億劫で、私は腹立たしい程の晴天を黙って見上げた。

陛下が現れたのは夜……ではなく、姫騎士様が退出されてから僅

か30分後。

そして、現れた途端に、一言を言い放った。

「現状維持」

侍女頭が話したのだろうか。

予想の範囲内だから、別に驚きはしない。

驚きはしないけれど……どうして、そんなに「ご機嫌斜め」なのですか？

「……お耳が早いですね」

なんて、言いながら。

陛下の全身から滲み出ている不穏な空気に、つい腰が引ける。

「お前に関してはな」

言うなり、陛下は私を捉えると、肩へと担ぎあげた。

抱っこではない。

まるで行商人が荷物を担ぐがごとく、私を肩に乗せて歩き出す。

「陛下!？」

何!？

これは、一体何なの？

陛下は、どうしてしまったの!？

「陛下!」

無言のまま、私を寝台に運んだ陛下は、これもまた荷物を降ろすように、私をそこに落とした。

柔らかいから痛くはない。

痛くはないけれど、何が何だか。

びっくりして態勢も整えられずにいる間に、陛下が私の上に伸び掛かってくる。

大きな影が、身体を覆い尽くして。

「陛下!」

どうしたいという考えもないままに、陛下の肩に手をついて押しのけようとすれば、いまだかつてない乱暴さで、手首を掴まれて、寝台に押さえ付けられた。

「陛下!？」

痛い。

ぎゅっと握られた手首が軋む。

熱い。

重ねられた陛下の身体が、先日発熱された時よりも熱くて。

怖い。

私を見下ろしてくる視線が、初めて謁見したあの時よりよほど鋭い。

「怒っていらっしゃるの？」

聞くのも、間抜けなほどに、陛下の怒りは明らかだ。

「さあな」

陛下からはそんな返事。

そして、また、射抜くような視線で、私を見下ろす。

以前の私なら逸らしてしまっていただろう視線を、怯えながらも受け入れて見つめ返す。

「……どうして……怒っていらっしゃるの？」

現れた途端に口になさった『現状維持』、というそれがお気に障ったのだろつとは想像がつく。

つくけれど、どうして？

だって、陛下は、そう望んでいたのではないの？

「……誰が母親だ？」

陛下が問いかける。

私は答える。

「私」

陛下の表情がひきつる。

「ほお？」

そして、更に不機嫌オーラが増して、私の手首を押さえつける手に力が入る。

「母親ではないのですか？ あ、もしくは姉？」

密着する身体の体温も上がった気がするわ。

これ、まずいのではない？

私、底なしに陛下のご不興を買っている？  
どうしよう。

また、泣きたくなってきた。

陛下のご不興が、故郷の国とか民に迷惑がかかる、なんてことは  
思いもしない。

ただ、私自身を、厭われることが哀しくて辛い。

「俺は、母親や姉に欲情するほど、外道ではないつもりだがな」  
私は涙を堪え切れなかったようだ。

陛下の声が幾分棘を失い、目尻に唇が触れる。

「……そんな……陛下は、口先ばかりです」  
顔を隠したい。

きつと、とても情けない表情をしている。

それこそ、昔の幼い陛下のような。

でも、手首をがっしり捕えられてそれもできない。

小さな足掻きで、私を顔をそらして半分をシーツに埋めた。

「このまま……口先ではないと証明しても俺は構わんが」

陛下が……完全に棘を取り払って、今度は甘さを含ませて耳元で  
囁く。

艶っぽい声と、耳元を掠める吐息に、私は肩を竦めた。

「……お前は？」

陛下が私の手首を離れた。

でも、私は動かなかった。

僅かに視線だけを動かして、陛下を見上げる。

「私？」

陛下の手の平が、ドレスの上から私の胸を包む。

耳元から首筋に唇が滑って。

「俺は……お前にとって、たくさんいる弟の一人か？」

そう思えたら、と思った。

添い寝をしている時

膝枕をしている時や、着替えのお手伝いをしている時だって。

「お前の方こそが……俺をそう扱おうとするだろう」

鎖骨に口づけた陛下は、私の耳元に戻ってそう囁く。  
どうしよう。

なんか、身体から力が抜けて。

頭がぼうつとしてきて。

自分が何を言おうとしているのか、分からない。

「それは陛下が……」

私は、乳房を包む大きな手の平の上に、私の小さな手の平を重ねた。

「俺が？」

そう、求められていると思ったんだもの。

こうして、戯れることがあっても、決して、その先に進まないから。

だから。

「……陛下が」

「うん？」

陛下が私に更に身体を重ねる。

熱い。

すごく、身体の芯から火照る。

「何もしないから」

浮かされるように、私はそう呟いていた。

「お前」

呆れたような声が聞こえる。

私は、また、泣きたくなりながら。

「いつも途中でおやめになるではないですか。この間だって……」  
私は……求めている。

陛下を。

なのに。

「だから、私……陛下は私に母親をお求めかと思って」

そうなのかしら、とずっと思ってた。

今日、昔を思い出して、そう確信したんだもの。

やはり、あの頃と同じことを求められているだけだったって。

かるく『現状維持』なんて、言ってみただけ……本当は。

「お前は……俺がどれだけ忍耐を強いられていると思っっているの？」

先にもまして、心底、呆れた口調だった。

だが、私がそれに落ち込む間もなく、すぐに今までにない艶美さと……それから淫靡さを含んだ声が囁いた。

「毎晩、夢でどれだけお前を好きにしていると思う？」

熱いため息が首筋にかかる。

思いも寄らず、背筋にびりつと何かが走り、私は身を反らした。

「っそんなの……知りません」

陛下がほんの少し身を起こし、真正面から私を見下ろした。

鋭いのは相変わらず。

でも、もう、私はそれが怖くない。

「……これから、身を持って教えてやる……だから」

陛下の手のひらが私の頬を包む。

私は気がついた。

それが震えていることに。

「……一言で良い」

そう言つて、私の唇をなぞる指先も。

小刻みに震えている。

「お前の一言が欲しい」

私が、陛下との行く末を不安に思つたように。

この賢帝と名高い方も、不安を覚えていたのかしら。

「俺はお前を愛している。お前が欲しい」

声も震えているように聞こえた。

私は、じつと陛下を見つめた。

私の答えを待つ姿が、10年前の幼子に一瞬重なり、だが、すぐ

に消える。

「……何とお答えすれば良いのでしょうか」

愛の告白なんて、人生で初めてなんだもの。

愛していると言えば良いの？

陛下が欲しいと？

一言って、どうすれば私の想いを一番伝えられるのかしら。

「今、思っていることを、そのまま」

陛下に言われて、私は自然とそれを口にした。

「陛下のお言葉をうれしく思います」

そう、とても嬉しい。

私の腕は、私の意識しないところで陛下の首へと回った。

私の腕の中、陛下の身体が強張る。

でも、私はそれを気にせずに、ぎゅっとしがみついた。

「陛下をお慕いしております」

さすがに陛下を欲しいとは言えない。

年は経ていても、そこは初心者なんだもの。

お許しいただきたいの。

「……………現状打破、だな」

少しの間の後、陛下の声が聞こえた。

「え？」

聞き逃した。

聞き返そうとしたのに、陛下は私をシートへと更に沈み込ませる

ようにして。

「……っ陛下？」

まさか、でしょう？

不穩に動き始める手のひらと唇が……って、考えてみたら、先ほ

どまでも散々、そんな空気だったのだけど。

でも！

「し、執務の途中でいらしたのでしょう！？」

往生際が悪いなんて言わないで下さいよ？

これ、本気の心配です。

真昼間から、皇帝が後宮に入り込んで出てこないなんて。

そんな不埒なこと。

「明日やればいい……一日休んだくらいで我が国は揺るがん」

先ほど、震えていた指先は、いったいどこに？

手慣れた指先が、ドレスの紐を解く。

「陛下！」

重さなんて感じないのに、上からしつかり抑え込まれて、私は身動きが取れない。

いつか、脱がすのを手伝うなんて戯言を口になさっていたことがあつたけれど。

確かに、腹立たしい程に脱がすのがお上手ですね！

「陛下！」

私は、陛下の肩を叩いた。

でも、私の反抗なんて、全然全く陛下を留めることはなく、大きな手のひらは易々と晒した肌を辿り始めた。

このまま、大人しくしてしまう？

いえ、やっぱり、それはダメ！

だって。

「このようなこと、昼間からなさることではないでしょう！？」

私は叫んだ。

お日様は、まだまだ高い所にあるのよ？

この部屋の中だって、その光が差し込んで、衣類を半分脱ぎかけている陛下のお姿がはっきり見える。

って、ことは、私の姿も陛下には、見えている訳で。

そこは、もう少し初心者慮って頂きたいわ。

私の訴えに、ピタッと陛下の動きが止まる。

ほっと息をつきかけ

「それは……夜になればいいと言っことだな」  
その言葉に、今度は私が硬直する。

「……え？」

えーと、多分、そう……なのかしら？

「わかった。さつさと執務を終えてこよう」

言うなり、陛下は身を起こした。

「え？ え？」

私は、無意識に乱れたドレスを直しつつ、嬉々として立ち上がる  
陛下を啞然と見上げた。

夜？

それって、今夜ですか？

この状況で、そう言われればそうですね。

「ついでに明日は後宮にこもると宰相に伝えてくるか」

「ええ！？」

何故！？

何故、明日まで後宮にこもる必要があるのですか？

陛下の言うこと、今一つ分かりません！

「夜が楽しみだな」

陛下は、自らの乱れた衣服を直すと、今まで見せたことのないよ  
うな視線を私に寄越す。

鋭い。

甘い。

射抜く。

蕩かす。

「また、後で」

陛下は屈みこみ、私の胸元に一度だけ口づけて、颯爽と部屋を出  
て行かれた。

「夜？」

これは、一体。

私、ほんの数時間前まで、ここで母のよつに、姉のよつに陛下の

お側にいようと思ってませんでした？

「今夜？」

それが、今夜？

本当に？

あまりにいきなりの展開……私にとっては、ですけど。

「……本当に？」

本当も何も。

私のドレスは陛下に乱された状態で。

肌のあちらこちらに陛下の名残があつて。

今まさにその状態だったのを、夜に持ち越したただけだと思い知らせてくれる。

本当なら、侍女頭を呼んで、事の次第を話して準備すべきよね。そんなの分かつてるわよ。

「あ……雪……見れる？……」

だけど、私から出たのは、現実逃避以外の何物でもない、まったく方向違いの言葉だった。

## その9（後書き）

祝！ 両想い！！

続きはあるのか、ないのか……それは、読者様の反応次第！

## その10（前書き）

連載変更後、初投稿！

## その10

ようやく、だ。

10年という年月を経て、ようやく手に入れることができる……身も心も。

今夜のことを考えて、鼻歌でも歌いたいほどの上機嫌で執務室へと戻った俺は、そこで待っていた麗人を見た途端に嫌な予感に襲われた。

「お早いお戻りですね」

優雅な微笑みに縁どられた唇から告げられたその一言で、予感は確信になる。

「後宮に戻る」

短く言い放って、踵を返した俺の上衣がむんずと掴まれた。

昔ならば、首ねっこ。

しかし、今は背中。

いつの間にやら体躯の大小は逆転したが、この女との力関係に変化はない。

今の俺であれば、体力的にも権力的にも、何とでもできるだろうに、幼い頃から側付きとして仕えてきたこの騎士にはどうしてか刃向えない。

彼女に対する己の絶対的な精神的弱さを不本意ながらも認めて、大人しく足を止めて振り返る。

「俺の事情は分かっているな？」

通用しないだろうとは思いつつ、そんな風に訴えてみた。

「存じ上げておりますとも……ですから、2時間ばかりなら、待つて差し上げようと思ってましたのに」

につこりと上品な笑みを浮かべてはいるが、言うことは随分だな。2時間？

なんなのだ、その具体的な時間は。

言っておくが、10年越しの想いの成就だぞ？

2時間で足りる訳が……と、そういう話をしているのではないな。  
「こちらにいらっしゃったからには、今夜は後宮へのお渡りは諦めて下さいませね」

それは、つまり、夜通し俺に働けと、そう言っている訳か。

もちろん、必要であれば、一晩や二晩の徹夜は厭わない。

いや、今夜だってそもそも徹夜の心づもりは十分にあつたのだ。

ただし、場所は執務室ではなく寝室、相手は姫騎士やら宰相ではなく正妃の予定だ。

「例の件は片付いた筈だろう」

かつては脆弱な皇太子のお目付役であつた美少女は、今や、この国の外交の顔へと成長した。

美しい容姿と、毅然とした態度で、他国との調整に当たっている。とはいえ、それは表。

裏では、この女は数多くの密偵を抱え、ありとあらゆる国の、どんな小さな反乱分子も見逃さぬとばかりに目を光らせている。

むしろ、そちらこそが、姫騎士の本分と言えるかもしれない。

先日の西方部族の謀反の企ても、この姫騎士殿の密偵が大いに活躍し、事なきを得た。

「はい。あれについては、以降何一つ問題ありませんわ」

姫騎士は、満足げな笑みを浮かべて、柔らかな声で報告をくれる。世間では男ばかりでなく女をも魅了すると言われている姫騎士殿らしいが、俺に言わせれば、胡散臭いばかりの微笑みだ。

「別件か……何とかしろ」

できるものなら、しているだろう。

それが分かっているながら、一応は言ってみる。

「できるものなら、しております」

思ったとおりの返事が返ってきた。

姫騎士の笑顔は、絵画に描かれたもののように崩れない。

俺は、負けてなるかと、微笑みを返した。

「大丈夫だ。我が国の誇る姫騎士殿になしえぬことなどない」

彼女が自らここに来ていたという時点で、既に彼女自身ではどうにもならぬ事態なのだ。

だが、我ながらの往生際悪さを思いながらも、言わずにはいられない。

常ならば、すぐにもその事態に対応する。

しかし、今夜は常ではない。

俺の人生の一大事だ。

それを察して欲しいところなのだが。

「いいえ、陛下」

姫騎士の唇から笑みが消えた。

真摯なばかりの瞳が見上げてくる。

ああ、負けたな。

この瞳が見つめてくるだけで、俺はそれを認めざるを得ない。

「陛下のお力が必要なのです」

そんな風に言われれば、否と言える筈がない。

この女がどれほどに国を、世界を思い、平和を保たんと心を砕いているか、俺は誰よりも知っている。

そして、俺もまた、この女に負けぬ程にそれを願っていることに偽りはない。

だから。

「……話せ」

手近な椅子に座り、話の先を促した。

姫騎士の語るそれに、俺は舌打ちしたい思いを抑え込み、ただ静かに聞き入った。

次から次へと聞こえてくる大小の隷属国、同盟国の反旗の兆し。分かつているのだ。

俺は、皇帝として位を継承したばかりの若輩者だ。

他国にとっては未知数の王だ。

この王は、属するに値するのか、反旗を翻しとって代るべきなのか。

老獯な王達に、俺は試されている。

だから、出てきた問題には一つ一つ根気良く対応して、実績を築いていかなければならない。

それは、分かっているのだが。

最も大きな同盟国の一つに不穏な動きあり、とのこの報告はタイミングが最悪だった。

どうして、1週間ばかり後にしてくれぬのか。

思わず、抑えきれないため息が零れる。

どうやら、姫騎士の言うとおり、しばらくは後宮に渡るところではなさそうだ。

諦めのそれに、控えていた宰相が、そつと申し出る。

「妃殿下の元に遣いを送らせましょうか？」

俺は、ちらりとこれもまた、他国の王達に負けぬ、この国一番の老獯な側人を見遣った。

正妃と俺の状態を、どこまで知っているのか。

細い目元には、静かなものが湛えられているだけで、その心中は分らない。

「陛下はひと月ばかり、執務室にお籠りになるとお伝えしては？」

答えぬ俺の代りに、横から姫騎士が口を出す。

ちよつと、待て。

ひと月だと？

冗談だろう？

そんなに忍耐が続くものか。

「1週間だ」

姫騎士がサラリと言ってくれた言葉を、俺は即座に否定した。

そうして、手元の書類を引き寄せる。

「1週間で終わらせる」

宣言。

そして、後は黙々と書類に目を通しつつ、頭の中で同盟国との駆け引きを組み立てていく。

こちらの国の不利にはならぬように。

だが、あちらの国のメンツを潰さぬ程度に。

友好を保つ道を探る。

「今も昔も、あの方は……極上の餌ですわねえ」

そんな言葉が聞こえてきた。

あの方とは、もちろん後宮の最高位に位置する……正妃。

彼女が極上の餌とすれば、俺は馬か？

餌にありつきたいならば、走り続けろと言う訳か。

無礼極まりない言葉に、俺と姫騎士を小さい頃から知る宰相が苦笑いを零しているのが視界の隅を過ぎつつが、俺はそれにも何も言わず、目の前の書面を睨みつけた。

彼女に初めて会ったのは、8歳の時だ。

元々、何かあれば熱を出すような身体の弱い子供だった俺だが、母を亡くして以来心までもが脆く、ともすれば後を追って夢くなりそうな様相だった、と当時を知る侍女頭は言う。

慣れ親しんだ侍女や乳母が一時と離れることなく世話をしてくれたが、俺の身体も心も一向に良くなる兆しはなく、己でも覚えているが、あの当時俺ははっきり言って子供らしい生き生きとした様子など欠片もなかった。

最初は静観していた父王も、さすがに見かねたのだろう。

父は療養と称して、一つの国に俺を送り込んだ。

最も友好な関係を築いていた国の一つ。

大国ではないが、豊富な資源と温暖な気候で、とても過ごしやすい国なのだ、と旅立ちに不安を隠せない俺に教えた。

そして、あの時、父王は言わなかったが、そこにはもう一つの思いがあったのだろう。

同年代の子供達と親交を深めていけば、多少なりとも心も立ち直るだろうと。

そんな期待を抱いていたに違いない。

しかし、こう言っただけなんだから、あの時の俺に対してそれは甘かったと言わざるを得ない。

俺は当時、同年代の子供達と対等に遊べるような、健やかな男児ではなかった。

かの国に到着し、王子達の元に連れていかれ、一緒に遊ぶようにと紹介されたところで……大体が兄弟もなく宮廷の奥で侍女達にかしずかれるばかりの俺にとって、大人数で遊ぶこと自体が未知の世界だったのだから……とてもではないが、それは無理な話だった。

王子達は決して俺に乱暴を働くこともなければ、故意に意地悪をすることもなかった。

だが、当時の俺は、同年代の男児に、体力的にも精神的にもついていけるような状態ではなかったのだ。

あの時も、王子達に混じって、俺は庭を駆け回っていた。

正確に言えば、もう国に帰りたいばかりの俺を、王子達が引きずりまわしていた。

俺が帝国の皇太子だとも知らされていなかった彼らにしてみれば、ひ弱で愚図な俺は父親から手渡された少々扱いづらい厄介な玩具のようなものだったのかもしれない。

それでも、一緒に遊んでくれようとする意志はあったようだ。

一緒になつて、庭を走らされ。

だが、俺は一人疲れ果て。

情けなくも、最終的には盛大にこけた。

それまで必死に抑え込んでいたものが溢れて、不本意ながらも涙が零れた。

それを見て、王子達が大笑いをしているところに、彼女が現れたのだ。

「いい加減になさい！」

幼さの残る、だが、凜とした声が庭に響き、ピタリと王子達の笑い声が止まる。

「大姉様だ！」

一人が叫ぶ。

「わーい！　一の姉様だあ！」

王子達がこぞって声の方へと走り出す。

俺は痛みを堪えてなんとか身を起こして、振り返った。

「わーい！　ではありません」

現れた女性の口調は、少しばかり悪さをした時に叱る乳母のような響きを持っていた。

おとなの人？

だが、身体の大きさは、駆け寄る王子達の年長者とさほども違わない。

彼女は、飛びつこうとする年長者の頭をパコーンと小気味良くはたたいた。

そして、一列に並んだ王子達の額を一つずつ、ピンッと指先で弾いて。

「小さな子には優しくなさいといつも言っているでしょう！」

ピシヤリと厳しい声が庭を埋める。

小さな子、というのが俺のことだと思い至って、なんだかとても恥ずかしかった。

急いで、立ち上がって、汚れた服を手で払う。

「意地悪なんて、してないよ！」

王子の一人が、彼女に訴えている。

確かに、意地悪をされている訳ではなかった。

単に俺がひ弱なだけで……と思ったら、また泣けてきた。

「分かっているわ。でも、こちらの方と貴方達は同じではないのだから」

彼女は言うと、俺に近付いて来た。

俺は、彼女をじつと見つめた。

乳母や侍女程に大人ではないようだ。

俺の側付きの少女と同じ年くらいだろうか。

だが、その側人よりもずっと小さい。

俺も年の割に小柄だったが、その俺よりせいぜい頭一つ大きいだろうか、というくらいだ。

「ごめんなさい。決して、貴方に意地悪をしているつもりではないのです。兄弟が多いせいか、ちょっと粗野な子達で」

先ほど庭に響いたものとは全く違う、耳に優しい心地よい声だった。

そう言っている最中に俺の全身を見ていた彼女の視線が、膝あたりで止まる。

ずっと彼女の姿が目の前から消えて、慌てて探せば、己の前にしやがみ込んで膝についた土を払ってくれている姿を見つけることができた。

「血が出てますね……あちらで傷の手当をしましょう」

彼女は、勢いよく立ち上がり、俺の手を握った。

柔らかな手のひらは失った母親のものよりも少しふくよかで、だ  
が同じくらいに温かだった。

「……大丈夫です」

答えながらも、彼女が歩き出すのに合わせて足を進めかけると。

「すまなかつた！」

背後で王子が叫んでいるのが聞こえる。

俺は振り返って、小さく頷いた。

そして、隣の女性を見遣る。

「貴女は、あの子達の姉上なのですか？」

彼女は俺に視線を合わせてから、にこりと笑って答えた。

「そうです」

和む瞳はセピア色。

珍しくない色だが、どうしてもか心に残る彩り。

「……たくさん弟君がいらっしゃるんですね」

歩き出して瞳が逸らされてしまったことを、どうにも残念に思いながら話かけると、彼女は少しだけこちらに視線を向けて、答えてくれる。

「そうですね。あの子達以外にも弟がまだ2人おります。妹もたくさんおりますし」

たくさん兄弟がいるな、とは思っていた。

しかし、紹介されたのは王子ばかりで、まだ他に姫君までもが何人もいるのだと、俺はその多さにびっくりする。

「私は兄弟はいないんだ」

今までそれが普通のことだった。

なのに。

急にそれがとても寂しいことのように思えてきて、せつかく彼女を見るために上げていた顔を伏せてしまった。

彼女は足を止めた。

不審に思っ顔を上げると、彼女が俺を見ていた。

自分がどんな顔をしているのか分からなかったが、彼女見たさに俯かずにいると、彼女は微笑んだ。

ふわりとそよ風が吹いた気がした。

「……赤子をご覧になったことがありますか？」

急な問いかけに思えたが、俺はすんなりとそれに応えていた。

「見たことはありません。赤ん坊がいるのですか？」

赤ん坊、というものがこの世に存在することは知っている。

自分よりもとても小さくて、とても弱い生き物だとも。

だが、それは未知の生き物だ。

「はい……6番目の妹が先日産まれたばかりです」

彼女は、そう教えてくれてから、少し首を傾げるようにして尋ねて来る。

小さいけれど、大人。

彼女について、そう思っていた俺だったが、そんな仕草を見た途

端、ずっと自分に近いような気がした。

「ご覧になりますか？」

「良いのですか!？」

俺は思いがけず、己自身が驚くほどの大きな声で勢い良く尋ね返していた。

彼女は知らないだろう。

先ほどのからの一連のこの会話。そして、俯かない俺。

国から付いてきている護衛軍団が側にいたら、目を丸くしていたに違いない。

俺は普段、グズグズと言いたいこともまともに言えず、下ばかりを見ているような子供だったのだから。

なのに、今この時は当たり前のように。

彼女を見たいがために、背筋を伸ばして顔を上げ、彼女と会話をしたいがために、声を出している。

「会いに行きましょう」

彼女は俺の手を引いた。

俺はギュツとその手を握り返す。

「でも、まずは傷の手当てですね」

大きく頷いて、笑みを返した。

それは、この国に来てから……いや、母を失ってから、初めての笑みだったかもしれない。

それから、俺はその少女と一日の大半を過ごすようになった。

絵本を読んでもらった。

お伽話を話してもらった。

もっと幼い子供がしてもらったことだと分かっているけど、彼女の声がとても心地良くて。

添い寝や、膝枕で、昼寝をしたりもした。

せがめば彼女は応じてくれた。

今となって考えてみれば、よくぞ誰も咎めなかったものだ。

8歳とは言え男児が、一国の王女にせがむものとしては、少々度が過ぎていたと思う。

それだけ、俺が当時貧弱なばかりの子供だったということかとにかく。

そんな風に過ごしているうちに、気がつけば俺は彼女の弟達とも対等に遊べるようになっていた。

かの国に滞在したのは、実際2週間ばかりだったと記憶している。国に帰る時は、父王が迎えに来たのだが、それでも、俺を含む一団がどこの国の何者であるかは王家の子供達には知らされていなかったようで、別れ際の王子達の見送りは親しくなった友人に対するもの以外の何でもなく、俺は産まれて初めて同年代の友人というものをあの時に得たのだ。

彼女はたくさんの王族の中に紛れて、丁寧な礼を一つくれただけだった。

客人として訪れた子の面倒を見ることは、彼女にとって極々当たり前のことで。

俺は決して特別ではなかったのだろう。

馬車から飛び降りて、彼女に何かを言いたかった。

だが、次に会う約束などできる筈もなく。

また、どんな約束をすれば良いかも分からなかった。

何もできないままに、動き出した馬車の中、俺は隣に座る父に尋ねた。

「……父上、あの人にずっと側にいてもらうためには、どうすればいいのかな」

あの人、と言っただけだったが、俺の状況の報告をつぶさに受けていたのであろう父は、それが誰だかすぐに思い至ったようだ。

「あの姫君か？」

「うん。側にいて欲しいんだ」  
すぐに答える。

いつもグズグズとして、はつきりと物を言うことさえまならなかった俺が、強い意志をもってそう答えたことに父は少々面食らったようだ。

だが、すぐに理知的な笑みを浮かべて、真摯な答えをくれた。

「小国とは言え、一国の姫君だ。侍女という訳にはいかな」

その答えは、俺の望むものではなかった。

侍女……側にいて、俺の世話をする者。

違う。

それでは、だめだ。

「侍女ではだめだよ。それでは、他の者があの人に触ってしまうから」

そうだ。

城に仕える侍女達には、不埒な貴族の誘いが後を絶たないことを俺は知っていた。

それに、年頃になれば、どこぞに嫁いでしまうこともあり得るだろう。

「お前……それは」

父親が尋ねたいことが分かって俺は続けた。

「誰にもあげたくないんだ。僕だけの人にしたいんだよ」  
そうなのだ。

「ずっと側にいて欲しい」

あの人に側にいて欲しい。

あの人に触れて、触れられて。

他の者になんて、決して譲れない。

「どうすれば良いんだろう」

あの時の幼い俺は、まだ分かっていなかった。

それが、独占欲であり、情欲さえ伴っていることを。

「……ならば、妃として迎えれば良い」

やがて、父は俺に一つの答えをくれた。

「妃？」

「そうだ。私がお前の母を妃に迎えたように、お前はあの姫君を妃に迎えれば良い」

父には後宮に多くの妃がいた。

俺の母もその内の1人であったが、父王が是非に請うて召し上げた身分の低い女性だった。

父も己のように、側にいて欲しいと願ったのか。

こんな風に、どうしても……そして、ふと、気がついた。

俺は、母を失ったことに打ちひしがれていたが、父もまた最愛の妻を失ったのだ。

だが、その辛さを表に出すことなく、毅然とそこに在る。

それは、この父が。

「だが、そのためにはお前は皇帝にならねばならぬ」  
そうだ。

皇帝だからだ。

「強く、賢い王にならねば、姫君はお前の妃にはなってはくれぬだらう」

「……父上のように？ そうしたら、あの人は、母上のように妃になってくれるの？」

父は頷いた。

父は大きく、強く、賢い。

それに引き換え、己はなんと弱々しくみすばらしいか。  
皇帝などと地位には似つかわしくない。

だが、それが彼女を手に入れる手段であるならば。

「なるよ」

俺はきっぱりと答えた。

「絶対に皇帝になる。なつてあの人を妃にするんだ」

父王は微笑んだ。

「そうか……お前がそう決めたならば、私も約束しよう」

そう言つて、大きな手のひらを丸めて、小指だけを差し出す。

「お前が立派な皇帝となつたならば、必ずあの姫君をお前の妃に迎

えられるように、かの国の王にお願いしておこう」

俺の親指ほどもあるつかという小指に、自身の細い小指を絡める。いつか、この父王を凌ぐ王に……男になろうと誓う。

「はい」

俺の、怒涛の努力の始まりだった。

なるほど。

確かに、あの頃から彼女は極上の餌だった訳だ。

結局、これが最後と伝令を送り込むことができたのは、7日目の深夜だった。

あちらの出方次第でどう動くかを綿密に確認してから、この7日間まともに寝ていない老若の家臣たちを下がらせた。

残っているのは、話を始めた時と同じ、姫騎士と宰相のみの状況に幾らも気が緩んだ。

椅子に座ったまま瞼を伏せれば、急激な眠りに襲われる。

「陛下？ 後宮でお休みになつては？」

俺にそう尋ねてきたのは、寝不足にも負けず矍鑠とした様を崩さぬ宰相だった。

狸爺め……お前は何をどこまで知っているのか。

「……昼間からすることではないと言われたのだが」

何かと具体的に言うのは避けたものの。

ぼんやりと明けつつある空を窓の外に見つけて、半ばやけくそのような想いで俺は呟いた。

「朝はどうだろうな？」

「だめでしょうね」

即答は姫騎士。

さすがに寝不足を隠せない表情ながら、きっぱりと言う様は……

こんな会話であつても、美しく毅然として少しの遜色もない。  
「だろうな」

俺は椅子に沈んだ。

しかも、伝令が伝えたことに相手国が異議があれば、また宰相とにらめっこだ。

後宮に渡つて、なんとか説き伏せて、寝台にもつれ込むことができたとして、だ。

途中で邪魔が入るような羽目には陥りたくはない。

となれば、返事を待つしかないではないか。

この和睦に異議を申し立ててきたら、いつそ、軍を率いて攻め込んでやろうか。

そんな物騒な思考さえも浮かんでくる。

もつとも、戦にでもなるうものならば、それこそこの城に帰るとさえままなくなるだろう。

何よりも、あの心優しい正妃が戦など望む筈もない。

戦を起こす愚帝など一端思われたならば、彼女はあっさりと俺を見捨てるだろうか。

「1週間では終わらなかったか……俺の能力もたかが知れてるな」  
寝不足で少々軌道を外れた思考に修正を行いながら、つついぜば、苦笑いを浮かべた姫騎士が慰めをくれる。

「私は1か月を覚悟しておりました」

結局、眠ることもできず、ついではかりに姫騎士と宰相を相手に各国の状況を確認しながら、我が国の行方を語ること丸一日。

「陛下！」

勢い良く若い家臣が執務室に駆け込んでくる。

「先ほど伝令が帰り、全面的に和睦を受け入れると報告がございました！」

ほっとした空気が部屋に広がる。

どうやら、今回もなんとか俺はやり遂げることができたようだ。

「……おい」

ふと思いついて、傍らの宰相と姫騎士に声をかける。

「はい」

「この10年、俺はどうだった？」

10年。

母を失ってから時間であり。

あの少女に出会ってから年月。

「とても精進なさり、立派になりました」

宰相が答える。

休みなく努めてきた。

立派な王になるのだ、と。

それは最初は一人の女性を手に入れるためだった。

だが、途中から、それだけではなくて。

立派な王になり、争いのない、飢えのない、平和な世界を作らんと。

いつからは、それを真に望み、勤め、励んできた。

何一つ代償を求めることなく。

かの女性を妃に迎えることは別の次元で。

己は在るべき皇帝で在らんとしてきたのだ。

それは自信を持って言える。

だが、今は。

「褒美が欲しい」

「褒美、ですか」

そう、今は褒美が欲しい。

昔も今も、変わらないたった一つ。

「それは、私どもよりお妃様にねだられては」

訳知りの麗人が、首を傾げて進言する。

「そのために、だ」

「……何を望みですか？」

10年目にして、俺は初めて家臣たちに褒美というものを望んだ。

## その10（後書き）

え？

ここまでですか？

マジですか？

いや～～～連載ですから！（開き直るな～～！）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4337v/>

---

初恋と嫁き遅れとこれから、それから

2011年10月14日15時21分発行